

『嘔吐』

——作品と翻訳の間（２）——

C'est à vomir quand on sait exactement de quoi il s'agit...

西 村 牧 夫

プロローグ

ô rage ! ô désespoir ! ô traduction ennemie !

文学部教授嘘野が近ごろ耳にした話だが、大学には「深海魚」なる種族が棲息するそうな。キャンパスの内外にいかなる嵐が吹き荒れようとも、学内に深く潜行してただひたすら自分の世界に浸りこんでいる輩のことだ。同僚の奮闘努力を横目で見ただけで、無関心を決め込む箸にも棒にもかからぬ存在だ。「何だ、そりゃ俺のことじゃないか」と独りごちたが、実は、嘘野、陰謀の犠牲になって、あろうことか学部長を拝命する羽目になった。深海魚が海面近くに上がって息も絶え絶えの今日この頃である。

教室で学生たちの侮蔑と憐れみを買うほどの消沈振りだが、その嘘野教授が『嘔吐』というタイトルの本を示して突然吠えた。「これは詐欺だ！ この小説の翻訳者は“いろいろ直したいところが眼につき [...] 五カ月をかけてこのたびの改訳を完了した”と言っている。その意気やよし！ その良心的な態度に免じて、長年、真摯な読者を裏切ってきたその罪を私は許してやったのだ。しかも、この翻訳者は、私が師と仰ぐ Fr. サカイ・ブロック教授、そしてまた畏敬する私の研究仲間、J. 川口教授から“貴重な助言を得た”とも言っている。それですっかり信用してしまった私が馬鹿だった」

学生たちは唖然とするのみだ。先週も、Time Magazine (2007年12月3日：ヨーロッパ版)の表紙に踊ったタイトル“*The death of French Culture (La mort de la culture française)*”を紹介して切齒扼腕し、あげくの果てに「嗚呼、私の30数年のフランス語教員人生はいったい何だったんだろうか！」とはらはら涙を落とした嘘野だ。学生たちは「フランス文化の死」を嘆くよりも、エキセントリックな教員に付き合わされる不運にため息をつく。

そんな学生の反応には気づかず。嘘野は続ける。

「この翻訳者は、すでに1950年、『訳者のことば』でこんなことを書いているんだ。“訳者は、この長編を [...] 10年前に訳し、戦後、[...] 一書店より刊行したが、この機会に及ぶ

限りの訂正を施した。前の版の幾多の誤訳、悪訳について深い良心の痛みを感じている”。

ところで、この1950年から1970年代にかけては。実存主義が世界の思想界を席卷した時代だ。日本でも、サルトル自身が来日した1966年を頂点として、多くの若者たちが実存主義に熱狂した。この『嘔吐』を純粹な気持ちで読んだわけだ。神のごときサルトル様が書いた小説をわけが分からんと思ひながら、そして、実存主義を代表する小説を理解できぬ自分の頭の悪さを呪いながらね。私も学生時代はそうだった。

ところが先日、出張中にたまたま書店で La Nausée を見かけて購入し、帰りの車中で読んだのだが、小説として楽しくすいすい読めるんだ、もちろん、錯乱場面など分からないところもあるけどね。

つまり、若者たちがその難解さゆえに『嘔吐』に深遠な思想が込められていると思ったのは、とんでもない誤訳に起因する極めて日本的な現象だったのかもしれないね。

いずれにしても、1950年の翻訳は“及ぶ限りの訂正を施した”はずだが、間違いだらけだ。今さらあら探しをするのも無駄だから、適当にページを開いてみよう”

1. 1. 1950年版の翻訳から

(1) Les objets, cela ne devrait pas toucher, puisque cela ne vit pas. On s'en sert, on les remet en place, on vit au milieu d'eux: ils sont utiles, rien de plus. Et moi, ils me touchent, c'est insupportable.

「物体、それに<触れる>¹べきではない²。なぜなら³、それは生きていないから。人々は物体を使用し、そしてそれを片付け、その間で暮している⁴。物体は役には立つが、それ以上の何ものでもない。そして、それに触れる⁵のが、私には耐え難いのだ」(p.19)

1. 主語と目的補語を逆にして訳すなど、初心者でさえもしない間違い。
2. その結果、devoir の意味を取り違えている。
3. puisque は「当たり前」の前提を導く理由節だから、「モノは生きていない」(だから当然)「モノに触れてはいけない」という理屈がいかにも珍妙であるか、ここで気づかなければいけないはずだ。どうも、翻訳者は、初めから「サルトルの書くことは訳が分からない」という思い込みで訳しているとしか思えない。読者も「分からないのが快感」というマゾヒズムの世界に墮ちる。実存主義にかぶれた若者たちの「物体は生きていないからさわっちゃいけないんだよなあ!」という感じ入った声が聞こえてくるようだ。(嘘野は教室で「数万、いや数十万の読者を欺いた翻訳、これはもう完全な犯罪だ!」と喚いたものだ)
4. 「モノを使ったら、元の場所に戻す。(そんなふうに)人はモノに囲まれて暮らしている」(嘘野訳)
5. 「ところが、この私には、モノのほうがさわってくるのだ」(嘘野訳) それにしても、あくまで主語と目的補語を逆転して訳すというのは、どういう頭の働

きによるものか！

(2) —J'aimerais cent fois mieux qu'il courrait, disait-elle; cela me serait bien égal, du moment que cela ne lui ferait pas de mal.

「動いても身体に障らないようになってから、どこかへ行ってしまってくれたら、どんなにいいか知りません。そんなこと、私は平気です」と言っていた。(p.20)

ノーコメント！：「(自分の夫について) 女遊びでもしてくれたほうがよっぽどましなんですけどねえ。そのくらい我慢しますよ、あの人が元気でいてくれさえしたら」(嘘野訳)

(3) Ça ne va pas ! ça ne va pas du tout: je l'ai, la saleté, la Nausée. [...] Les cafés étaient jusqu'ici mon seul refuge parce qu'ils sont pleins de monde et bien éclairés: il n'y aura même plus ça; quand je serai traqué dans ma chambre, je ne saurai plus où aller.

気持ちが悪い！すっかりいやになった。私はそれを感じる。汚穢を、＜嘔気＞を感じている¹。[...] カフェは人が大勢いてそして大そう明るいので、これまで私の唯一の避難所であった。しかしもうそんなものさえないだろう²。私が自分の部屋から追いだされたときに、もうどこへ行ってよいか解らないだろう³。(p.32)

1. 「こいつはまづいことになった！ まったくどうしようもない。あの嫌なやつ、あの吐き気に取り憑かれてしまった」(嘘野訳)
2. 未来形や条件法を見れば「だろう」と訳す日本人の悪癖：「だが、もうこれからは、そんな逃げ場もなくなる。自分の部屋の中で追い詰められた気持ちになったら、もう行き場はないのだ」(嘘野訳)

(4) J'ai senti une vive déception au sexe, un long chatouillement désagréable. En même temps, je sentais ma chemise qui frottait contre le bout de mes seins [...]

私は性のはげしい失望を、かなり長い間の不愉快なむずがゆさを味わった¹。それと同時にワイシャツが乳房²の先端を摩擦しているのを感じていた。(p.32)

1. sexe は「性器」だろう。
2. ふつうに読むと、ロカンタンが女性化したかの印象を与えるが...

(5) Je flottais, j'étais étourdi par les brumes lumineuses qui m'entraient de partout à la fois. Madeleine est venue en flottant m'ôter mon par-dessus [...]

私は波の上に浮いていた¹。そして、あらゆるところから同時に、私の内部に入ってきた光っている霧に、感覚を失った。マドレーヌが泳ぐように²やって来て、私の外套を脱がせた。(p.33)

flotter を1「波の上に浮く」、2「泳ぐ」と訳すのはそれなりに一貫しているが、『嘔吐』の中の flotter は、ロカンタンが実存の世界にはまったときの「浮

遊感」を表すと考えるべきだろう。flotter は人やモノの位置づけが困難な状況で現れ、キーワードの1つと言ってもよい、いずれにせよ、「泳ぐようにやって来て」では歩くときの様態表現となり不適當。

(6) —Tu la fermeras, oui ? dit l'homme.

[...]

—Charles, je t'en prie, tu sais ce que je t'ai dit? Charles, reviens, j'en ai assez, je suis trop malheureuse !

「お前、あれを閉めるだろうな。そうだろう？」

[...]

「シャルル、ねえ。あんたに言ったこと、解ってるでしょう？ シャルル、帰って来てよ。もう沢山だわ。あまり私は不幸だわ！」

ノーコメント：「いい加減に黙ってくれよ、なあ！」「お願い、シャルル、私の言いたいこと分かるわよね。戻ってきてちょうだい。こんなもういや、私があんまり惨めじゃない！」(嘘野訳)

1. 2. 1994年版では...

ところで、以上の誤訳は新訳で改正されただろうか。(1)~(6)に対応する部分を以下に列挙する(下線部は相変わらず不満が残る箇所を示す)。

- (1) 物、それが人に(触れる)はずはないだろう。なぜなら、それは生きていないから。人びとは物を使用し、それを元の場所に置き、その間で暮している。物は役には立つが、それ以上のなにもものでもない。そして、それが私に触れることが耐え難いのだ。
- (2) 「女漁りでもしてくれたほうがまだましですよ。あの人のからだに障らないなら構いませんからね」
- (3) 気持が悪い。すっかりいやになった。私はあれを感じている。吐き気を感じている。[...] カフェは人が大勢いてたいそう明るいので、これまでは私の唯一の避難所だった。これからはもうそんなものさえないだろう。私が自分の部屋に追いつめられたなら、もうどこへ行ってよいかわからないだろう。
- (4) 私は性のげしい失望を、長い間の不愉快なむずがゆさを味わった。それと同時にワイシャツが乳房の尖端を摩擦しているのを感じていた。
- (5) 私は漂っていた。あらゆるところから同時に私の内部に入ってきた光っている霧によって、茫然自失していた。マドレーヌが漂いながらやってきて私の外套を脱がせた。
- (6) 「おい、もういいかげんに黙ったらどうなんだ

[...]

「シャルル、お願い。あんたに言ったこと、わかってくれるわね。シャルル、帰ってきて。もうたくさんよ。あたしはあんまり不幸だわ」

2. 日曜日のブッヴィル市民

以下、1994年版の翻訳を見ていこう。まず、翻訳書の p.68-p.77から。日曜日のブッヴィルの人びとの行動を皮肉な目でユーモラスに描いているのだから、あまり力まずなるべく平易に訳したいところ。

(7) *Dimanche.*

J'avais oublié, ce matin, que c'était dimanche. Je suis sorti et je suis allé par les rues comme d'habitude. J'avais emporté Eugénie Grandet. Et puis, tout à coup, comme je poussais la grille du jardin public, j'ai eu l'impression que quelque chose me faisait signe.

今朝、今日が日曜日であることを忘れていた。家をでて、いつものように街を歩いた。『ウジュニー・グランデ』を持って行った¹。それから、公園の柵を押ししたとき、ふいになにかが私に合図をした²ように感じた。

1. フランス語では複合過去 suis allé と大過去 avais emporté の組み合わせで時間関係が明白だが、日本語で「街を歩いた」→「(本)を持って行った」は唐突。「私は本を持って出かけたのだった」では重いと感じられるなら、「街を歩いた、本を手にして」ぐらいに軽く訳す。

2. 「合図しているように」(半過去)

(8) Je suis resté un moment appuyé contre la grille et puis, brusquement, j'ai compris que c'était dimanche. C'était là sur les arbres, sur les pelouses comme un léger sourire. Ça ne pouvait pas se décrire, il aurait fallu prononcer très vite: «C'est un jardin public, l'hiver, un matin de dimanche.» J'ai lâché la grille, je me suis retourné vers les maisons et les rues bourgeoises et j'ai dit à mi-voix: «C'est dimanche.»

私はちょっとの間、柵によりかかっていたが、ふいに、日曜日であることに気づいた。軽い微笑のようなものが樹々の上、芝生の上にあった。なんとも説明できないもので¹、「ここは公園である、冬、日曜日の朝²」とたいへん口早に言ってみるべきだったろう³。私は柵から手を放し、家々のほう、町人的な街路⁴のほうを振向いた。私は⁵小声で言った。「日曜日なんだ」

1. 「それはことばで言い表すことができなかった」
2. 「これは冬のある日曜日の朝の公園だ」

3. 「素早く [...] とでも言えばよかったのかもかもしれない」(未来形・条件法は、なるべく「だろう」を避ける工夫をしたい)
4. 「ブルジョア然とした家々と通り」
5. 「振り向いて、小声で言った」

(9) Bientôt, en silence, les colonnes noires vont envahir ces rues qui font les mortes: d'abord viendront les cheminots de Tourville et leurs femmes qui travaillent aux savonneries de Saint-Symphorin, puis les petits bourgeois de Jouxtebouville, puis les ouvriers des filatures Pinot, puis tous les bricoleurs du quartier Saint-Maxence; les hommes de Thiérache arriveront les derniers par le tramway de onze heures. Bientôt la foule des dimanches va naître, entre des magasins verrouillés et des portes closes.

やがて黙々とした黒い縦隊が死んだふりをしているこれらの街々に侵入するだろう¹。まさききトゥルヴィルの鉄道員たちと、サン・サンフォランの石鹼工場で働いているその妻君達がやってくるだろう¹。つぎにジュクストブーヴィルの小市民階級の連中、ピノ製糸工場の職工たち、それからサン・マクサンス界隈のすべての便利屋たち²がやってくる。チエラシュ地方の住民たちは十一時の電車³で最後に着くだろう¹。やがて日曜日の群集が、扉に門をかけた商店や閉ざされた門の間に生れるだろう¹。

1. 「だろう」が多すぎる。ここは日曜日ごとに繰り返されるブーヴィル風景であることを意識すべき、
2. 「定職に就かずブラブラしている連中」(?) (bricoleur = *Péjor. personne qui n'a pas d'occupation suivie*)
3. tramway

(10) Une horloge sonne la demie de dix heures, et je me mets en route: le dimanche, à cette heure-ci, on peut voir à Bouville un spectacle de qualité, mais il ne faut pas arriver trop tard après la sortie de la grand-messe.

大時計が十時半を打つ。私は歩きだす。日曜日のこの時刻にブーヴィルでは、荘厳ミサが終ってからあまり遅くならなければ上等なお芝居が見られる。

⇒「日曜日のこの時刻、ブーヴィルの町ではなかなか結構な光景を目にすることができるのだ。ただし、ミサが終わって信者が出てくる時間を見計らってやって来る必要がある」

(11) Dans le passage Gillet, le bruit croît encore et je le reconnais: c'est un bruit que font des hommes. Puis soudain, sur la gauche, il se produit comme un éclatement de lumière et de sons.

ジレ・パッサージュ通りでは、騒音は一層増大する。それは聞き覚えのある、人間の立てる騒音である。それから突然、左手で光と音の爆発のようなものが起る。

⇒「ジレ小路（あるいは、パサージュ・ジレ）に来ると、騒音はさらに大きくなる。私には何の音だか分かる。人間たちの立てる音だ。それから突然、左手のほうで突然光が輝き、音が轟く」

(12) Il y a seulement soixante ans nul n'aurait osé prévoir le miraculeux destin de la rue Tournebride, que les habitants de Bouville appellent aujourd'hui le petit Prado.

わずか六十年前においても、こんにちブーヴィルの住民たちがマドリッドの散歩道になぞらえて小プラドと呼んでいる木賃宿街の奇蹟的な運命を、あえて予想したものはひとりとしていなかっただろう。

⇒「ほんの60年前、いったい誰が大胆に予想しただろうか？　こんにちブーヴィルの住民たちがマドリッドの散歩道になぞらえて小プラドと呼んでいるT...通りの奇蹟的な運命を」

(13) Peu de mois après, la femme du maire de Bouville eut une apparition: sainte Cécile, sa patronne, vint lui faire des remontrances. Était-il supportable que l'élite se crottât tous les dimanches pour aller à Saint-René ou à Saint-Claudian entendre la messe avec les boutiquiers ? それから数カ月後, ブーヴィルの市長夫人が幻を見た。守護の聖女セシルが忠告をしに出現したのである。エリートたちが、日曜日ごとに聖ルネ教会や聖クロージアン教会へ、商売人たちといっしょにミサを聴くため泥塗れになって行くのは耐え難いことではないか。

⇒「それからほんの数カ月も経たぬうちに、ブーヴィル市長夫人が聖霊の顕現を見た。町の守護聖女セシルが小言を言いに来たのだった。「エリートたちが、日曜日ごとに聖ルネ教会や聖クロディアン教会へ、しかもしがたい商店主たちと一緒にミサを聞きに行くために、馬糞まみれになるなどということは耐え難いことではないか（というわけだった）」

(14) Les nouveaux messieurs du boulevard Maritime, encore peu nombreux, mais fort riches, se firent tirer l'oreille: ils donneraient ce qu'il faudrait, mais on construirait l'église sur la place Marignan; s'ils payaient pour une église, ils entendaient pouvoir en user; ils n'étaient pas fâchés de faire sentir leur puissance à cette altière bourgeoisie qui les traitait comme des parvenus.

海岸（マリチーム）通りの、まだ数は少なかったが非常に富裕な新興紳士たちは、この案に容易に賛成しなかった。必要な費用はさすが、教会はマリニャン広場に建てることにしたいというのである。彼らは金をだす以上は、その教会を便利に使用したいと考えていた。そしてまた、成上り者として彼らをあしらうあの傲慢な旧来の市民たち（ブルジョワジー）に自分たちの力を見せつけてやることは、溜飲の下がる思いだった。

⇒「まだ少数ではあったものの大変な財力を持つマリチーム大通りの新興勢力

は、なかなか首を縦に振らなかった。「必要なものなら出しますがね、教会はマリニャン広場に建ててもらいますよ。建設費用を出す以上、私たちに教会を利用させていただきたいものです」というのが彼らの言い分だった。彼らを成り上がり者として扱った高慢なブルジョワたちに自分たちの財力を思い知らせることで溜飲を下げていたのだった」（この部分はやや大胆に「自由間接語法」的解釈と説明的解釈とに分けてみた。なお、フランス語の「自由間接語法」は日本語では直接語法で訳したほうが手取り早く、また分かりやすい）

(15) La rue Tournebride, large mais sale et mal famée, dut être entièrement reconstruite et ses habitants furent fermement refoulés derrière la place Sainte-Cécile; le petit Prado est devenu—surtout le dimanche matin—le rendez-vous des élégants et des notables. Un à un, de beaux magasins se sont ouverts sur le passage de l'élite. Ils restent ouverts le lundi de Pâques, toute la nuit de Noël, tous les dimanches jusqu'à midi.

幅は広いが汚くて評判の悪い木賃宿街は、全面的に改修されねばならなかった。その住民は聖女セシル広場の後方に断乎、押し込められてしまった。この小プラドは一特に日曜日の朝には一きざな男たちや有名人たちの集まる場所となった。一軒また一軒と、こぎれいな商店がエリートの通路に面して開店した。これらの店は、復活の月曜日にも開いているし、クリスマスには終夜営業をし、日曜日は昼までやっている。

⇒「T通りは広く汚く評判の悪い場所であったが、全面的に改修されることになり、住人たちは聖セシル広場の裏側に強引に押しやられた。小プラドは一とりわけ日曜の朝には一しゃれ者と町の名士たちの会合の場所と化し、すてきな店が次々にこの名士たちの通りにできていった。店々は復活祭の月曜日、クリスマスの夜の間中、それから毎日曜日の正午まで開いている」(*le passage de l'élite* : 定冠詞は日本語に訳さない (=限定辞をつけない) のが原則だが、「この」と訳すという場合がある)

(16) Il y a deux ans, au coin de l'impasse des Moulins-Gêmeaux et de la rue Tournebride, une impudente petite boutique étalait encore une réclame pour le Tu-pu-nez, produit insecticide. Elle avait fleuri au temps que l'on criait la morue sur la place Sainte-Cécile, elle avait cent ans. Les vitres de la devanture étaient rarement lavées: il fallait faire effort pour distinguer, à travers la poussière et la buée, une foule de petits personnages de cire revêtus de pourpoints couleur de feu, qui figuraient des rats et des souris. Ces animaux débarquaient d'un navire de haut bord en s'appuyant sur des cannes; à peine avaient-ils touché terre qu'une paysanne, coquettement vêtue, mais livide et noire de crasse, les mettait en fuite en les aspergeant de Tu-pu-nez.

二年前まで、木賃宿街とムーラン・ジュモー袋小路の角にあった恥知らずの小さな店が、殺虫剤チェ・ピユ・ネの看板をまだだしていた。この店は聖女セシル広場を鱈売りが呼び売して歩いていたころ栄えた創業百年にもなる店だった。店頭窓ガラスは滅多に磨かれないので、埃と曇りを透して、鼠や二十日鼠をかたどっているオレンジいろの胴衣を着た小さい蠟細工のたくさん的人物を見るには骨が折れた。これらのけだものは杖をつきながら遠洋航路の船からおりてくるが、足が地に着くや否やあだっぼい服装をした、しかし血色が悪く垢で黒く汚れたひとりの百姓女にチェ・ピユ・ネを振りかけられ追散らされる。

⇒「2年前にはまだ、M.J. 袋小路とT通りの角に臆面もない店構えの小さな商店があって、チュ・ピユ・ネという殺虫剤のポスターが貼られていた。(その昔)サン・セシル広場の市でタラ売りの声が響いていた時代に流行った店で、創業100年だった。しかし、ショーウィンドーのガラスはめったに磨かれることがなく、たくさん置かれた火の色をした胴衣の小さな蠟人形を見分けるには、ほこりと水蒸気で曇った窓越しに目をこらさねばならなかった。(実は)人形はネズミやハツカネズミをかたどっていたのだった。ネズミたちは杖をついて大型船から下船するのだが、上陸したとたんに1人の農婦に殺虫剤をかけられて退散させられるという筋書きだった。この農婦は男達の気を引くような服装をしていたが、肌は垢まみれで鉛のように青黒かった」

(17) J'aimais beaucoup cette boutique, elle avait un air cynique et entêté, elle rappelait avec insolence les droits de la vermine et de la crasse, à deux pas de l'église la plus coûteuse de France.

私はこの店が非常に好きだった。それは、フランスで最も金のかかった教会のすぐ傍にしながら臆面もなく頑固に、害虫や垢の権利を無礼にも思い起させていたから。

⇒「私はこの店が大好きだった。シニカルで頑固な雰囲気が出て、フランスで最も高くついた教会から目と鼻の先で、厚かましくも虱や蚤や垢まみれの権利を主張していたからだ」

(18) Dans la rue Tournebride, il ne faut pas être pressé: les familles marchent lentement. Quelquefois on gagne un rang parce que toute une famille est entrée chez Foulon ou chez Piégeois. Mais, à d'autres moments, il faut s'arrêter et marquer le pas parce que deux familles, appartenant, l'une à la colonne montante et l'autre à la colonne descendante, se sont rencontrées et solidement agrippées par les mains.

木賃宿街では急いではない。家族連れがゆっくりと歩いているからである。ときどき列をつめることができるのは、フーロンの店やピエジョワの店へ家族全員が入ったからである。しかし他の場合には、立止って足踏みをしていなくてはならない。なぜなら、一方は坂を登って行く縦列にまじり、他方は降りてくる縦列にまじっている二家族が出会っ

て、互に固く手を握りあい放さないからである。

⇒「T通りでは急いではいけない。みんな家族づれでゆっくりと歩くからだ。ときどき、ひと家族全員が菓子屋や花屋に入ってゆくものだから、1列分よけいに進めるときがある。しかし、逆に立ち止まって足踏みさせられることもある。というのは上りのひと家族と下りのひと家族が出会って互いに堅く手を握りあったりするからだ」(この場合、*d'autres moments* は意味をとって工夫したほうがいい:「逆に...することもある」)

(19) J'avance à petits pas. Je domine les deux colonnes de toute la tête et je vois des chapeaux, une mer de chapeaux. La plupart sont noirs et durs. De temps à autre, on en voit un qui s'envole au bout d'un bras et découvre le tendre miroitement d'un crâne; puis, après quelques instants d'un vol lourd, il se pose.

私は小さきみに歩いて行く。私は、***すべて頭だけの二本の縦列を見下ろしているので、たくさんの帽子を、帽子の海を見ている。大部分は黒くて礼装用の帽子だ。ときどきそれらのひとつが腕の先で舞い、禿げた頭が現われ、それが柔かく光る。それからややあって、***こんどは重たげに跳んで帽子はもとの位置に収まる。

⇒「こんなとき、私は小股で進む。私は(背が高く)上り・下りの列を頭1つ分見下ろすことになるから、目に入るのはたくさんの帽子、帽子の海だ。たいていは黒くて堅い。ときには、そんな帽子がひとつ、腕の先でひょいっと持ち上がり、柔らかな光りをたたえた頭がむき出しになったりする。それから、しばらく重々しく空中をさまよったあげく、元の位置に戻るのだ。」(*dominer qn/qch de... の de の意味を見落とさないようにしよう*)

(20) Elle a l'air de penser: «Voilà M. Coffier, le président de la Chambre de commerce; comme il a l'air intimidant, il paraît qu'il est si froid.» Mais M. Coffier n'a daigné rien voir: ce sont des gens du boulevard Maritime, ils ne sont pas du monde. 彼女はこう考えているようだ。「あそこに商工会議所会頭のコフィエ氏がいる。なんてこわい感じのする人だろう。ずいぶん冷淡らしいこと¹」と。しかしコフィエ氏ともなればそんなことは歯牙にもかけない²。そこにいるのは海岸通りの住人であって、上流社会の者ではないからだ。

⇒「あれは商工会議所会頭のコフィエさんだわ。すごく威圧感がある。とっても冷たい人らしいけど」だが、コフィエ氏は見向きもしない、何も目に入らないのだ。そこにいる連中はM大通りの人間であり、社交界の人間ではないからだ」(*I. il paraît que... = on dit (prétend) que... / 2. daigner* は訳しにくい単語の1つ。翻訳書の「歯牙にもかけない」というのは悪くない)

(21) Il fait encore quelques pas, penché sur son fils, les yeux plongés dans ses

yeux, rien qu'un papa; puis, tout à coup, se tournant prestement vers nous, il jette un coup d'oeil vif au petit vieillard et fait un salut ample et sec, avec un rond de bras. Le petit garçon, déconcerté, ne s'est pas découvert: c'est une affaire entre grandes personnes.

息子のほうにからだを傾け、その眼に見入って、父親以外のなに者でもないといった恰好でおも二、三步進む。それから急に私たちのほうに素早く向きを変えると、小柄な老人に敏捷な視線を投げ、腕で輪を作るようにして鄭重なしかしお義理の挨拶をする¹。男の子は面喰って帽子をとらなかつた。それは大人たちに係わりのあることなのだ²。

1. 「小柄なコフィエ氏が素早く視線を投げかけ、腕をぐると回して大げさなしかし素っ気ないあいさつをする」(*le petit vieillard* はフランス語文脈では定冠詞の働きで問題なく解釈されるが、日本語では誰のことかを明白にする)
2. 「男の子は面喰って帽子をとらないでいた。「大人同士の話は僕には関係ない」というわけだ」

(22) On repart, dans un ordre légèrement modifié. M. Coffier a été repoussé derrière moi.

前とほんの少しばかり形のちがった列を作って人びとはまた歩きだす。コフィエ氏が押されて私のうしろへくる。

⇒「人びとは再び歩き出すが、順序がやや違っている。コフィエ氏が押されて私のうしろに位置したのだ」(「歩き出す」→「うしろへくる」ではなく「うしろへくる」→「歩き出す」。現在形と複合過去の関係に無頓着なのは度し難い)

3. brasserie Vézélise から日曜日の終わりまで (翻訳書 p.79-p.92)

(23) Un silence, la femme est retombée dans son rêve. Tout à coup elle frissonne et demande: —Qu'est-ce que tu dis ? —Suzanne hier. — Ah ! oui, dit la femme, elle avait été voir Victor. —Qu'est-ce que je t'avais dit ? / La femme repousse son assiette d'un air impatienté. / —Ce n'est pas bon. / Les bords de son assiette sont garnis des boulettes de viande grise qu'elle a recrachées

沈黙。女は再び物思いに耽る。ふいに女は身を震わせてたずねる。「なんの話よ、それ」「昨日のシュザンヌさ」「ああそう。あの娘はヴィクトールに会いに行ったわ」「***お前になんと言ったっけ」女はじれったそうに皿を押しやる。「***これよくないわ」皿の縁に、彼女が吐きだした灰いろの肉の丸い塊が載っている。

⇒「しばしの沈黙、妻は再び物思いに沈んだ。そして突然、体を震わせ、尋ねる。「今、何て言ったの?」「昨日のシュザンヌのことだけだ」「ああ、そう、そう、彼女、ヴィクトールに会いに行ってたのよね」「やっぱり、俺の言ったたとおりじゃないか」妻はじれったそうに皿を押しよける。「これ、おいしくない」皿

の縁には彼女が吐き出した肉の塊が並んでいる」(大過去 *avait été, avais dit* に注意)

(24) Au bout d'un moment: —Je te l'avais dit, l'autre jour. —Qu'est-ce que tu m'avais dit ? —Victor, qu'elle irait le voir. Qu'est-ce qu'il y a, demande-t-il brusquement d'un air effaré, tu n'aimes pas ça ? —Ce n'est pas bon. —Ça n'est plus ça, dit-il avec importance, ça n'est plus comme du temps de Hécart.

すぐに男が続ける。「いつだったかそのことをおれは言ったよ」「なにを言ったというの」「ヴィクトールのことさ。あの娘が会いに行くだろう、って。どうしたんだい」うろたえた様子で突然たずねる。「それきらいなのかい」「***これよくないわ」「***もう、前のようじゃないね」と勿体ぶって言う。「もう、エカールがいた時のようにはいかないね。

⇒ しばらくして:「この前、お前にそうなるって言ったじゃないか」「何てよ?」「ヴィクトールにさ、あの娘 {こ} が会いに行くだろうって。どうしたんだよ?」[...「それ、嫌いなのか?」「おいしくないの」「もう前とは違うよな。エカールがやってた時とは違うんだ」

(25) —Oh ! oui, il fait chaud, dit la femme en gémissant, on étouffe ici et puis le boeuf n'est pas bon, je le dirai au patron, ça n'est plus ça, ouvrez donc un peu le vasistas, ma petite Mariette. / Le mari reprend son air amusé: —Dis donc, tu n'as pas vu ses yeux ? —Mais quand, mon coco ? / Il la singe avec impatience: —Mais quand, mon coco ? C'est bien toi: en été quand il neige. —Hier tu veux dire ? Ah ! bon.

「そう、まったくね」と妻が呻くように言う。「ここは息が詰まりそうだわ。それから牛肉がよくないことよ。ご主人に言いましょう。もう、前みたいじゃないわ。ねえマリエット、少し換気窓を開けて頂戴な」夫が再び面白がっている様子になる。「ねえお前、あれの眼を見なかったかい」「でもいつのこと。あんた」彼はいらいらしながら妻の口裏似をする。「でもいつのこと、あんた。***そりやお前じゃないか。***夏に雪が降る時って」「昨日のことね、ああ、じやわかったわ」

⇒ 「そう、本当に暑いわね」と妻は呻くように言った。「ここは蒸し暑くて息が詰りそう。それに、肉もまずいわ。店の主人に言ってやろうかな。昔の味じゃないわね。ねえ、マリエット、少し小窓を開けてくれるかしら」[...「ねえ、あの娘 {こ} の目を見なかったのかい?」「それって、いつの話?」夫はじれったそうに妻の口真似をする。「“それって、いつの話?” まったくお前ってやつは(←(そういう言葉・行為など)お前らしいな)！ まったくトンチンカンなんだから」「昨日のこと？ なんだ、そうか」

(26) —Ça n'est pas vrai, ça n'est pas vrai. / Il dit d'un ton raisonnable et posé: —Écoute-moi, mon petit, puisqu'il l'a dit: si ça n'était pas vrai pourquoi

est-ce qu'il l'aurait dit ? —Non, non. —Mais puisqu'il l'a dit: écoute, suppose... / Elle se met à rire: —Je ris parce que je pense à René. —Oui. / Il rit aussi. Elle reprend, d'une voix basse et importante: —Alors, c'est qu'il s'en est aperçu mardi.

「そりや嘘よ、そりや嘘よ」男は事柄を弁えているといったおだやかな口調で言う。「そんなことはないさ。彼がそう言ったんだから。嘘だったら、どうして彼がそんなことを言ったんだい¹」「ちがうわ、ちがうわ」「でも彼がそう言ったんだから。ねえ、考えてごらんよ...」妻が笑いだす。「ルネのことを考えると、おかしくなるのよ」「そうだね」男も笑う。女は低いが念を押すような声で続ける。「それじゃ彼がそのことを火曜日に気がついたわけね」

⇒「嘘よ、嘘」彼は分別くさい落ち着いた口調で言う。「あのねえ、だって彼がそう言ったんだぜ。本当でなければ、彼がそんなこと言うわけないだろう?」「違う、違う」「でも、彼がそう言ったんだから、ほら、だってさあ...」妻が笑い始める。「おかしくなっちゃった、だってルネの顔を思い出したんだもん」「そうだな」彼も笑う。彼女が再び、もったいぶった低い声で言う。「じゃ、ルネは火曜日にあのことに気づいたわけね」(1. 条件法に注意:「本当でなかったら、どうして言っただろうか(言わなかったことだろう)」→「本当だからこそ言ったのだ」)

(27) Mais j'entends encore la femme qui dit: —Dis, Marthe, je vais la faire rire, je vais lui raconter... / Mes voisins se sont tus. Après la tarte, Mariette leur a donné des pruneaux, et la femme est tout occupée à pondre gracieusement les noyaux dans sa cuiller. Le mari, l'oeil au plafond, tapote une marche sur la table. On dirait que leur état normal est le silence et la parole une petite fièvre qui les prend quelquefois.

しかし私はやはり妻の声を聞いてしまう。「ねえ、あの女を笑わせてやるわ。マルトを。話してやるわ……」隣席の男女は沈黙した。パイがすむと、マリエットは干李(ほしすもも)をだした。妻は匙の中へ優雅に種を落すことに夢中だ。夫は天井に眼をやりながらテーブルをこつこつと叩いて行進曲の拍子をとっている。彼らの普通の状態は話をしないことであり、言葉はときおり彼らを襲うちょっとした熱病のようだ。

⇒「しかし、妻の声がかた聞こえてくる。「ねえ、マルトのことだけど、私、彼女を笑わせてみせるわ。彼女に話してあげようと思うの...」(ふと気づくと)隣のふたりは黙っている【複合過去¹】。タルトのあとでマリエットが干しスモモを持ってきたのだ【複合過去²】。妻はスプーンの中にその種を優美に吐き出そうと気持ちを集中させている。夫は天井を見上げ、テーブルの上でマーチを奏でている。まるで沈黙こそが平常状態であり、言葉は彼らを時折襲う微熱でも

あるかのようだ」(複合過去は、「沈黙した」→「干しスモモをだした」ではなく、「干しスモモが出てきた」から「沈黙した」と読むべきだろう)

(28) Elles (=ces personnes) attendaient avidement l'heure des douces ténèbres, de la détente, de l'abandon, l'heure où l'écran, luisant comme un caillou blanc sous les eaux, parlerait et rêverait pour elles. Vain désir: quelque chose en elles resterait contracté; elles avaient trop peur qu'on ne leur gâchât leur beau dimanche. Tout à l'heure comme chaque dimanche, elles allaient être déçues: le film serait idiot, leur voisin fumerait la pipe et cracherait entre ses genoux ou bien Lucien serait si désagréable, il n'aurait pas un mot gentil ou bien, comme par un fait exprès, justement aujourd'hui, pour une fois qu'on allait au cinéma, leur douleur intercostale allait renaître.

「彼らは心地よい闇の時間を、寛ぎと放心の時間を熱心に待っている。水面下の白い小石のようにきらめく銀幕が、彼らのためにしゃべり、夢を作り出す時間を。その欲望は満たされないだろう。彼らの心の中のものには、ほぐれないままに残るだろう。***心配しすぎたので、かえって楽しい日曜日を台無しにしてしまったことがあるのだ。やがていつもの日曜日と同様に彼らはがっかりするだろう。映画が下らないかもしれないし、隣の観客がパイプを喫ったり、膝の間に痰を吐くかもしれない。それとも、リュシアンがとても不愉快で、一言も優しい言葉をかけてくれないとか、あるいは、たまたま映画館にきたところ、間が悪く今日に限って肋骨の痛みが再発するとか、失望の種はいろいろあるかもしれない」

⇒「みんなが、優しい暗闇の時間、くつろいで身を任せる時間、水底の白い石のようにスクリーンが輝き、自分たちになり代わって語ったり夢を見たりしてくれる時間を今か今かと待ちかまえていた。はかない望みだ：彼らの心の中には何かしこりのようなものが消えずに残るだろう。せっかくの日曜日を台無しにされるのが心配でたまらないのだ。間もなく、いつもの日曜のように、彼らは失望させられることになる。映画はたぶんくだらないし、隣の観客がパイプを吸ったり、ひざの間に痰を吐いたりするかもしれない。もしかしたら、リュシアンはひどい態度で、やさしい言葉ひとつかけてくれないかもしれない。あるいはまた、珍しく映画を見に来たというのに、こともあろうに肋骨の痛みが再発したりするかもしれない」

(29) Je tournai à gauche et j'entrai dans la foule qui défilait au bord de la mer. Elle était plus mêlée que le matin. Il semblait que tous ces hommes n'eussent plus la force de soutenir cette belle hiérarchie sociale dont, avant déjeuner, ils étaient si fiers.

私は左に曲って、海岸を練り歩いている人びとの群の中に入って行く。この群は、朝の群

集よりも玉石混淆だった。これらの人たちは誰も彼も、昼食前までのあれほど誇らしげだった見事な社会階級を保つ力を、もはや失ったかのようだ。

⇒「私は左に曲がり、海辺を歩く人ごみの中に混じった。群集は朝よりも雑多になっていった。この男たちはみな、あの見事までの社会の階層化を維持する力をもはや失っているようだった。昼食前まではあんなにも誇りにしていたのに」
(センテンスが長く、日本語では意味がとりにくくなる場合、このように2つに分ける手もある)

(30) —Là, là, là, regarde, dit-elle. —Quoi ? —Là, là, les mouettes. / Il haussa les épaules: il n'y avait pas de mouettes. Le ciel était devenu presque pur, un peu rose à l'horizon. —Je les ai entendues. Écoute, elles crient. / Il répondit: —C'est quelque chose qui a grincé. / Un bec de gaz brilla. Je crus que l'allumeur de réverbères était passé. Les enfants le guettent, car il donne le signal du retour. Mais ce n'était qu'un dernier reflet du soleil. Le ciel était encore clair, mais la terre baignait dans la pénombre.

「あれ、あれ、あれをごらんよ」女が言う。「なに」「ほら、ほら、鴬よ」男は肩をすくめる。鴬はいなかった。空は澄み透るばかりで、水平線にわずかに赤みがさしていた。

「鳴き声が聞えたわ。お聞きよ。ほら、鳴いてるわ」男が答える。「なにかが軋ったんだ」ガス灯が輝いた。街灯の点灯夫が通ったのだと思った。***彼が帰宅の合図をするので、子供たちは彼を見張っている。だがそれは太陽の最後の反映にすぎなかった。空はまだ明るい、地上は薄闇に浸っている。

⇒「あそこ、あそこ、あそこを見て」[...]「何だよ?」「あそこの鴬」男は肩をすくめた。鴬なんかいない。[...]「だって、聞こえたんだもの。ほら、鳴いてるわ」[...]「何かが軋ったんだろ」ガス灯が1つ輝いた。点灯夫が通ったのだと私は思った。子供たちは(いつも)点灯夫が通るのを窺っている。子供たちにとって点灯夫の姿が帰宅の合図になるからだ。だが、それは太陽の最後の照り返しにすぎなかった。空はまだ明るい、地上は薄闇に包まれていた(しばらく前から単純過去が使われていることに注意。il n'y avait pas de mouettes は自由間接話法的に訳してみた。guettent, donne の現在形に注意。超時的用法(習慣)として解釈)

(31) Une jeune femme, appuyée des deux mains à la balustrade, leva vers le ciel sa face bleue, barrée de noir par le fard des lèvres. Je me demandai, un instant, si je n'allais pas aimer les hommes. Mais, après tout, c'était leur dimanche et non le mien.

防波堤の手すりに両手でよりかかっていた女が、口紅が黒い線を引いたように見えるその蒼い顔を空にむけた。***人間を愛さないでいられるだろうか、と私は一瞬の間自問した。

しかし結局、今日は彼らの日曜日で、私の日曜日ではないのだ。

⇒「1人の若い女が、手すりに両手をつけて、青い顔を空に向けた。口紅が顔に黒い線を引いたように見える。一瞬、私は、ひょっとして人間たちを愛することになるのではなからうかと思った。しかし、結局のところ、これは彼らの日曜日で、私の日曜日ではないのだった」(〈*se demaner si* + 否定〉は「～ではなからうかと自問する」)

(32) Le dimanche qui finit leur a laissé un goût de cendre et déjà leur pensée se tourne vers le lundi. Mais il n'y a pour moi ni lundi ni dimanche: il y a des jours qui se poussent en désordre, et puis, tout d'un coup, des éclairs comme celui-ci. / Rien n'a changé et pourtant tout existe d'une autre façon.

終わった日曜日は苦い後味を彼らに残した。そしてもう月曜日のことを考えている。しかし私にとっては月曜日もなければ郎眸計もない。あるのは秩序なく継起する日々と、***づぎのように突如生れる閃光である。なんの変化も起きなかった。しかしながら、すべてが別の仕方で存在するのである。

⇒「終りつつある日曜日は灰のような後味を彼らに残し、そして彼らはもう月曜日のことを考えている。しかし、私には月曜日もなければ日曜日もないのだ。あるのは脈絡もなく継起する日々と、それから、突如として、今日のようにきらりと光る日がある。/ 何も変わらなかったが、それでいて、すべてが今までと違う存在のしかたをしている」

(33) Quelque chose va se produire: dans l'ombre de la rue Basse-de-Vieille, il y a quelque chose qui m'attend, c'est là-bas, juste à l'angle de cette rue calme, que ma vie va commencer. Je me vois avancer, avec le sentiment de la fatalité. なにかが起るだろう。バス・ド・ヴィエュー街の暗闇の中でなにかが私を待っている。向うの、ちょうどひっそりとしたあの街角で私の人生がはじまるだろう。宿命感をもって自分が進んでいるのに気がつく。街角に白い境界標のようなものが立っている。

⇒「なにかが起ろうとしている。バス・ド・ヴィエュー街の暗闇の中で何かが私を待ちかまえている。私の人生が今にも始まろうとしているが、それはあそこで、この静かな通りの角で始まるのだ。私には自分が宿命に導かれて進んでいるように見える」

(34) Je ne suis pas pressé de me remettre en marche. Il me semble que j'ai touché la cime de mon bonheur. A Marseille, à Shanghai, à Meknès, que n'ai-je fait pour gagner un sentiment si plein ? Aujourd'hui je n'attends plus rien, je rentre chez moi, à la fin d'un dimanche vide: il est là.

私は***ゆっくりと歩きだす。自分が幸福の絶頂に触れたかのように思われる。マルセーユや、上海や、メクネスで、***これほど充実した感情を得るためになにをしたのだったか。

今日、私はもうなにも期待しない。空虚な日曜日の終りに家へ帰る。幸福は手の届くところにあるのだ。

⇒「私はすぐに慌てて歩み始めることはしない。自分が幸福の絶頂に触れたと思うのだ。マルセーユや、上海や、メクネスにいた時なら、これほど充実した感情を得るためだったら、(ためらわずに) 何だってしたものだ。(ところが) 今日、私がもう何の期待も抱かずに、空虚な日曜日が終わって家へ帰ろうという時に、まさに幸福が待っていたのだった」

(35) Il faut pourtant choisir: je sacrifie le passage Gillet, j'ignorerai toujours ce qu'il me réservait. La place Ducoton est vide. Est-ce que je me suis trompé ? Il me semble que je ne le supporterai pas.

なにはともあれ選択しなければならぬ。私はジレ・アーケード通りを犠牲にする。私のためにそこにながとってあったか、永久に私は知らないだろう。/ デュコトン広場はがらんとしている。私は間違っただろうか。***間違っただ自分が許せないように思われる。

⇒「しかし、どちらかを選択しなければならない。私はバサージュ・ジレを犠牲にする。この小路が私に何を用意していたのか、これで永久に知らぬままだ。/ デュコトン広場はがらんとしている。私は間違っただろうか。万が一間違いだったら、私にはとても耐えきれないと思う」(条件法 *supporterais* を正確に理解しなければならない)

4. 1. 反省の月曜日からアニーの手紙まで (翻訳書 p.93-p.104)

(36) Ce qui me dégoûte, au fond, c'est d'avoir été sublime, hier soir. Quand j'avais vingt ans, je me saoulais, et ensuite, j'expliquais que j'étais un type dans le genre de Descartes. Je sentais très bien que je me gonflais d'héroïsme, je me laissais aller, ça me plaisait.

じっさい私に嫌悪を催させるのは、昨夜、自分が有頂天になっていたということである。二十歳のとき私は***自分に酔っていた。自分がデカルト流の男なのだ和釈明していた。自分が英雄的な気持でいっぱいなのを非常に強く感じてはいたが、成り行きに任せていた。それが気に入っていたのだ。

⇒「私が嫌なのは、結局のところ、昨夜、自分がやたらに格好をつけたことなのだ。20歳のとき私は酔っぱらっていたものだ。(そして、酔いが覚めると) 自分がデカルト流の男なのだ和釈明していた。自分がヒロイックな気分で高揚しているのはちゃんと自覚していたが、[抑制せず] その気分のままで、悦に入っていたのだった」

(37) Hier, je n'avais même pas l'excuse de l'ivresse. Je me suis exalté comme un imbécile. J'ai besoin de me nettoyer avec des pensées abstraites, transparentes.

tes comme de l'eau. / Ce sentiment d'aventure ne vient décidément pas des événements: la preuve en est faite.

昨日は酔っていたなどという弁解さえも成り立たないのだ。ろくでなしのように私は昂奮していた。水のように透明で抽象的な観念によって自分を清める必要がある。あの冒険の気持、それはどう考えてもじけんからはやってこない。このことは立証されている。

⇒「(しかも) 昨日のことに關しては、酔っていたという口実もきかない。私は馬鹿みたいに舞い上がってしまった。水のように透明な抽象的思考でもって自分を洗い清める必要がある。/ やはり、自分が冒険に立ち会っているというあの感覚は、ちょっとした出来事や事件があったということとは関係がないのだ。まさに、昨日の出来事がその証明になる」(この場合は、*複合過去 me suis exalté* のアスペクトは尊重したい)

(38) Voilà, je pense, ce qui se passe: brusquement on sent que le temps s'écoule, que chaque instant conduit à un autre instant, celui-ci à un autre et ainsi de suite; que chaque instant s'anéantit, que ce n'est pas la peine d'essayer de le retenir, etc. Et alors on attribue cette propriété aux événements qui vous apparaissent dans les instants; ce qui appartient à la forme, on le reporte sur le contenu.

思うに、つぎのようなことが起きる。突然時の流れるのを、一瞬間が他の瞬間に連なり、他の瞬間がまた別の瞬間に連なり、以下同様であるのを感じる。また、各瞬間は消え去り、それをとどめようとする必要はないこと等々を感じる。そこで人びとは、瞬間の(中に)出現する出来事に、いま述べた矧剛の特性を附与するのである。言い換えれば、形式に属するものを内容の所属とするのである。

⇒「私の考えではこういうことだ。つまり、不意に我々は時間が流れていくのを感じる。ひとつひとつの瞬間が我々を次の瞬間へと導き、その瞬間がまた次の瞬間へと我々を導く、というように。ひとつひとつの瞬間は消滅していくから、それを引き止めようとしても無駄だ、等々を感じる。そういうわけで、我々はこの(次々に流れていく)特質を瞬間瞬間に生じる出来事の特質だと考えてしまう [=瞬間の持つ時間的特質を出来事自体の特質にすり替えて考えてしまう]。つまり、形式 [=瞬間] に属するものを内容 [=出来事] に移してしまうのだ」

(39) On voit une femme, on pense qu'elle sera vieille, seulement on ne la voit pas vieillir. Mais, par moments, il semble qu'on la voie vieillir et qu'on se sente vieillir avec elle: c'est le sentiment d'aventure.

ひとりの女性を眺め彼女が年老いるであろうと思う、だが彼女が老いているのを(見る)のではない。しかし、時には彼女が老いるのを(見る)ように思われ、また彼女とともに

自分が老いるのを感じるように思う。それが冒険の気持なのである。

⇒「女性を見て、彼女が年を取るであろうと思う。ただし、それを（実際に）目で捉えることはない。だが、時として彼女が年を取りつつあるのを見ているように感じ、自分も一緒に年を取っていくように感じるがあったりする。それが冒険感覚なのだ」

(40) On appelle ça, si je me souviens bien, l'irréversibilité du temps. Le sentiment de l'aventure serait, tout simplement, celui de l'irréversibilité du temps. Mais pourquoi est-ce qu'on ne l'a pas toujours ? Est-ce que le temps ne serait pas toujours irréversible ? Il y a des moments où on a l'impression qu'on peut faire ce qu'on veut, aller de l'avant ou revenir en arrière, que ça n'a pas d'importance; et puis d'autres où l'on dirait que les mailles se sont resserrées et, dans ces cas-là, il ne s'agit pas de manquer son coup parce qu'on ne pourrait plus le recommencer.

もし私の記憶に誤りがなければ、それを人びとは時間の非可逆性と呼んでいる。冒険とはただ単に時間の非可逆性の気持ちだろう [条件法]。だがなぜ人びとはつねに冒険の気持を持たぬのだろうか [部分否定]。時間がつねに非可逆的ではないということだろうか [条件法]。望み通りのこと、たとえば、敢然と進んだり、または後じさりすることが自由にでき、そうすることがわけないと思うときがある。それから、綱目が詰っているとでも言いたいような時があり、その場合には、***もうやり直しはきかないだろうから [条件法]、へまをしたで済む問題ではないのだ。

⇒「私の記憶に間違いがなければ、この感覚は時間の不可逆性と呼ばれている。どうやら、冒険感覚とはただ単に時間の不可逆性の感覚だということになりそう。しかし、それなら、そういう感覚を常に持つわけではないのはなぜだろう。ひょっとして」時間というのはいつも不可逆というわけではないのかもしれない。何でも自分の思い通りにできそうに思える瞬間があるものだ。進んでも退いても、どうでもいい瞬間が。(他方)まるで網の目がしっかりと締められて(身動きのとれないような)瞬間もある。そういう場合、やり損なうことは許されない。やり直しがきかないからだ」(最後の部分：条件法だが日本語訳に反映させる必要のない場合もある。この場合、ありそうもない仮定に関して、必然的な帰結を表している)

(41) Anny faisait rendre au temps tout ce qu'il pouvait. A l'époque où elle était à Djibouti et moi à Aden, quand j'allais la voir pour vingt-quatre heures, elle s'ingéniait à multiplier les malentendus entre nous, jusqu'à ce qu'il ne restât plus que soixante minutes, exactement, avant mon départ; soixante minutes, juste le temps qu'il faut pour qu'on sente passer les secondes une à une.

Je me rappelle une de ces terribles soirées. Je devais repartir à minuit.

アニーは***時間に可能な限りのあらゆるものを負わしめた。アニーがジブチに、私がアデンにいたころのことである。私が二十四時間だけ暇ができて会いに行くと、アニーはあらゆる工夫をめぐらして、ことごとくにふたりの間に誤解を生じさせた [習慣の半過去]。そんなわけで、私が帰る真際まで正確にいってもう六十分しか残っていなかった。六十分、それはまさしく一秒一秒とすぎてゆくを感じるのに適切な時間である。私はいまでもあのように残酷な数々の夜の一夕を思い浮べる。私は午前零時に発たなければならなかった。

⇒「アニーは時間が精いっぱい時間らしさを発揮するよう工夫していた [←時間ができることすべてを時間に吐き出させるようにしていた]。その頃、アニーはジブチで、私はアデンで暮していた。アニーと24時間一緒に過ごそうと思って会いに行くと、(いつも)、彼女は、ふたりの間のすれ違いを大きくすることにばかり力を注ぐのだった。私の出発前に残された時間がぴったり60分しかない時刻になるまでそんな調子だった。60分という、まさに一秒一秒が過ぎてゆくのが感じられる時間だ。そんな畏るべき一夜が今でも忘れられない。私が夜中の0時に出発することになっていた時のことだ」

(42) Journée de travail. Ça n'a pas trop mal marché; j'ai écrit six pages, avec un certain plaisir. D'autant plus que c'étaient des considérations abstraites sur le règne de Paul Ier. Après l'orgie d'hier, je suis resté, tout le jour, étroitement boutonné. Il n'aurait pas fallu faire appel à mon coeur ! Mais je me sentais bien à l'aise en démontant les ressorts de l'autocratie russe.

仕事日、仕事はどうかはかどった。かなり楽しい気分で六頁書いた。パーヴェル一世の治世に関する抽象的な考察だっただけになおさら楽しかった。昨夜は浮れすぎたので、今日は一日中、羽目はずさぬように用心していた。とは言え自分の気持に助けを求める必要なんかなかっただろう。ロシアの専制政治の***ばねを分解しながら私の心は安らかだったのだ。

⇒「仕事をした1日だった。なかなかうまくいった。6ページ書いたが、何か楽しかった。パーベル1世の治世に関しての抽象的な考察であったからなおさらだ。昨日はやりたい放題だったから、今日1日は、あまり感情にまかせないよう神妙にしていた。(昨日のように)心に訴えたりしてはいけないから！ とはいえ、ロシア独裁体制の様々なからくりを分析していると、いい気分だった。

(43) «Mon cher Antoine.» / Je souris: certainement non, certainement Anny n'a pas écrit «mon cher Antoine». / Il y a six ans — nous venions de nous séparer d'un commun accord — je décidai de partir pour Tokio. Je lui écrivis quelques mots.

私は微笑を浮べる。いやいやアニーはたしかに(親しいアントワーヌ)などとは書かな

かった。六年前のことである。私たちが合意の上で別れたばかりのころ、私は東京へ出掛けようと決心した。私はアニーに短い便りをだした。

⇒「私はニヤッとする。いや、これは違う。Mon cher Antoine（愛しいロカントン）などとは書いていないはずだ。6年前—私たちは互いに納得して別れたばかりだった—私は東京へ旅立つことにし、アニーに短い手紙を書いた」

(44) Rien qui puisse me fixer sur ses sentiments. Je ne peux m'en plaindre: je reconnais là son amour du parfait. Elle voulait toujours réaliser des «moments parfaits». Si l'instant ne s'y prêtait pas, elle ne prenait plus d'intérêt à rien, la vie disparaissait de ses yeux, elle traînait paresseusement, avec l'air d'une grande fille à l'âge ingrat.

アニーの気持を正確に知らせるようなものはなにひとつない。私はそれに不平を言うことはできない。そこに私はアニーの完璧さへの愛を認める。〈完璧な瞬間〉の実現をつねにアニーは欲していた。もしも***瞬間がアニーの意に副わなかったらば、アニーはもうなんに対しても興味をなくしてしまい、その眼から生気が消え失せ、思春期に達した一人前の娘みたいに、だらだらと無為に日を送るのだ。

⇒「これではアニーの気持がどうなのかさっぱりわからない。(しかし)私が不平を言う筋合いではない。この文面には完璧さを大事にするアニーの心 [ou 完璧さに対するアニーのこだわり] が認められるからだ。アニーはいつでも〈完璧な瞬間〉を実現しようとしていた。その時が完璧な瞬間になりそうになかったら、アニーはすべてに興味を失ってしまう。色気の出始めた大きな女の子のようにだらだら怠惰に時を過ごすのだった」

(45) Il ne fallait pas répondre, il fallait attendre: soudain à quelque signal, qui m'échappait, elle tressaillait, elle durcissait ses beaux traits languissants et commençait son travail de fourmi. Elle avait une magie impérieuse et charmante; elle chantonnait entre ses dents en regardant de tous les côtés, puis elle se redressait en souriant, venait me secouer par les épaules, et, pendant quelques instants, semblait donner des ordres aux objets qui l'entouraient.

答えてはならなかった。待たねばならなかった。***思わず私の顔に現われたなんらかのしるしを見て、ふいにアニーは身震いし、美しい疲れたような顔を硬ばらせ、根気のいる仕事をはじめるのだった。アニーには高飛車だが愛らしい魔術があった。彼女は四方八方を眺めながら小声で歌を口吟む、それから、微笑しながら立上って私のところにくると、両肩に手をかけて私を揺さぶる。するとちょっとの間、アニーの周囲にある事物に秩序が与えられるように思われた。

⇒「(言い返してはいけない。待っていないなければならない。(すると)突然、何らかのサイン(兆し)を見て—それが何だか私には分からないが—身震いし、そ

のやるせなさそうな美しい顔立ちを険しい表情に変え、アリのように根気のいる作業をはじめたのだ。アニーには相手に有無を言わせない、しかしチャーミングな魔力があった。[...] 微笑しながら背筋を伸ばし[ou 微笑を浮かべ毅然とした態度で]、私の両肩をつかんで揺さぶる。そして、しばらくの間自分の周りにあるものに何か命令しているように見えるのだった)

(46) «[...] Tu vois comme ce moment-ci pourrait être beau ? [...] Recule-toi, va t'asseoir dans l'ombre; tu comprends ce que tu as à faire ? Eh bien, voyons ! Que tu es sot ! Parle-moi.» / Je sentais que le succès de l'entreprise était dans mes mains: l'instant avait un sens obscur qu'il fallait dégrossir et parfaire: certains gestes devaient être faits, certaines paroles dites: [...]

「いまこの瞬間が美しいものになるかもしれないってことはわかるわね。[...] さあ退って、影の中に腰掛けてよ。あなたがなにをしなければいけないかわかって。***ああ、どうしたっていうの。なんて間抜けなの。さあ、なにかしゃべりなさいってば」/ この企ての成功如何は、懸って自分の手中にあることを感じていた。この瞬間の持つ意味がはっきりしないので [論理的関係にすべきではない]、その解明に取組み、完璧なものにしなければならなかった。ある特定の動作がなされるべきだった。ある特定の言葉が言われるべきだった。

⇒ 「「ねえ、分かる？ 今のこの瞬間は（私たち次第で）美しい瞬間になれるかもしれないのよ。[...] さあ、下がって、暗いところに坐ってちょうだい。しなきゃいけないこと分かってる？ あらあら、しっかりしてよ！ ホントにおバカさんなんだから！ お話するんでしょ」/ [...] この瞬間にはよく分からない意味が込められている。その粗い表面を磨いて、意味を完成させなければならなかった。しなければならぬ動作、口にしなければならぬ言葉があるのだ」

(47) j'étais accablé sous le poids de ma responsabilité, j'écarquillais les yeux et je ne voyais rien, je me débattais au milieu de rites qu'Anny inventait sur le moment et je les déchirais de mes grands bras comme des toiles d'araignées. A ces moments-là elle me haïssait. / Certainement, j'irai la voir. Je l'estime et je l'aime encore de tout mon coeur. Je souhaite qu'un autre ait eu plus de chance et plus d'habileté au jeu des moments parfaits.

私は責任の重さに圧倒されていた。眼を大きく開いてはいたが、なにも見てはいなかった。アニーが瞬間の上につくりあげた儀式のさなかで私はもがき、大きな腕で、蜘蛛の巣を破るようにそれを破ってしまったのだ [半過去]。そんなとき、アニーは私を憎んだ。/ きっと私はアニーに会いに行くだろう。私はアニーを尊敬している、まごころをもっていまでも愛している。私は、***完璧の瞬間のゲームの中で私ではないもうひとりのほうが

もっとチャンスに恵まれ、また巧妙でもあったことを願っている。

⇒「私は責任の重さに押しひしがれ、目を大きく見開くののだが、何も見えてはこなかった。アニーが咄嗟に思いついた儀式のさなかで私はもがき、(結局)張り巡らされた儀式の数々を蜘蛛の巣でも破るように大きな腕で引き裂いてしまうのだった。そういうとき、アニーは私に憎しみを抱いた。/ もちろん会いに行くことにしよう。私にはアニーのよさが分かっているし、今でも心から愛している。アニーにだれか別の男との出会いがあって、その男が私よりも完璧の瞬間ゲームにツキがあり、もっと上手なプレーヤーであったならばいいのだが」

(48) J'essaie de le (= son sourire) rappeler encore: j'ai besoin de sentir toute la tendresse qu'Anny m'inspire; elle est là, cette tendresse, elle est toute proche, elle ne demande qu'à naître. Mais le sourire ne revient point: c'est fini. Je reste vide et sec.

私はもういちどその微笑を思いだそうとする。アニーによってよびさまされた情愛をすべて感じたいのである。その情愛はそこに、私のすぐそばにある。ただ生れるのを待っているだけだ。けれども微笑は少しも戻ってこない。おしまいだ。私は相変らず虚ろで、白けた気分のままである。

⇒「(さっき思い出し、再び消えてしまった) その微笑を私は呼び戻そうとする。アニーが呼び起こしてくれる優しさを最大限感じる必要があるのだ。ほら、そこにある、その優しさは私のすぐそばにある。声をかけられたらすぐに姿を現そうと待ちかまえている。しかし、微笑は全然戻ってこない。もうだめだ。私は空っぽでひからびたままだ」

(49) La bonne ne bouge pas. Son visage, dans la glace, a l'air de dormir. En fait, ses yeux sont ouverts, mais ce ne sont que des fentes.

給仕女は身動きしない。鏡に映っている彼女の顔は眠っているようだ。***事実, 眼は開いてはいるけれどもそれは割れ目にすぎない。

⇒「[...] 実は、眼を開いているけれども、それは単なる割れ目にすぎない」(日本人によく見られる *en effet* と *en fait* の混同に注意)

(50) Est-il seulement possible de penser à quelqu'un au passé ? Tant que nous nous sommes aimés nous n'avons pas permis que le plus infime de nos instants, la plus légère de nos peines se détachât de nous et restât en arrière.

***過去のだれかを考えることぐらいは可能なのだろうか。私たちが互に愛しあっていた限り、ふたりで過すほんのわずかな瞬間も、ごくつまらない苦労もそれが私たちから離れて背後に残ることを許さなかった。

⇒「第一、人のことを過去形で想うことからして可能なんだろうか。互に愛しあっていた間は、ふたりで過すどんなにわずかな瞬間も、どんなに些細な苦し

みも、それが私たちから離れて過去にとどまることなど許しはしなかった」(この *seulement* は日本語では表しにくい)

(51) Les sons, les odeurs, les nuances du jour, même les pensées que nous ne nous étions pas dites, nous emportions tout et tout restait à vif: nous n'avons pas cessé d'en jouir et d'en souffrir au présent. Pas un souvenir; un amour implacable et torride, sans ombre, sans recul, sans refuge. Trois années présentes à la fois.

一日の音や匂いや微妙な色調、互に打明けなかった考えさえすべてを私たちは持って行き、すべてはいきいきとした形で残っていた。私たちはそれらのものを現在において愉しみ、また苦しむことをやめなかった。ひとつの思い出とてなかった。あったのは灼けるが如き強烈な、影も後退も避難所もない恋愛だけだった。三年の月日が、そっくりそのまま現存していた。

⇒「[...] 口には出さず(胸中に秘めていた)考えさえも、すべてを私たちは手放さずに持ち歩き、すべてが(まさに今現在のものとして)剥き出しのままだった。私たちはそれらのものを現在形で享受し続け、現在形で苦しみ続けたのだった。何一つとして思い出などにはならなかった。あるのは、情け容赦のない灼熱の愛。影一つない、後ろを振り向くことのない、逃げ場のない愛。今というそのひとときに詰め込まれた(←同時に存在する)三年の月日」

4. 2. アシル氏 (翻訳書 p.104-p.116)

(52) —Ça l'a vexée. On dit ça comme ça; on dit: pauvre fille. C'est sans intention. / Mais elle lui tourne le dos et s'en va derrière le comptoir: elle est vraiment offensée. / Il rit encore: —Ha ! Ha ! Ça m'a échappé, dites donc. **On** est fâché ? **Elle** est fâchée, dit-il en s'adressant vaguement à moi.

「怒ったんだね。よく言うじゃないか。ほらかわいそうな娘さんて。別に他意があったわけじゃないよ」/ だが女はくると背を向け、カウンターの陰に行ってしまう。ほんとうに気を悪くしているのだ。/ 男はまた笑う。「はっはっは、うっかり口を滑らしたのさ、ねえ。怒ったのかい、怒ってるんだね」男はなんとなく私に話しかけるような調子で言う。

⇒「怒らせちゃったな。でも、何となくそんな言い方するじゃないか。しょうもない娘 {こ} だって...」/ [...]「はっはっはっ！ 口が滑っちゃったな、なあ、おい、怒ったのかい？ あの娘 {こ}、怒ってますね」と(今度は)何となく私に向かって言う」

(53) Je ne possède que mon corps; un homme tout seul, avec son seul corps, ne peut pas arrêter les souvenirs; ils lui passent au travers. Je ne devrais pas me plaindre: je n'ai voulu qu'être libre. / Le petit homme s'agite et soupire.

私は自分のからだしか持たない。まったく孤独で、自分のからだしか持たない男に、思い出をとどめておくことはできない。思い出はこの男を***斜めに通り抜ける。私は ***不平を言うべきではなかっただろう [条件法]。なぜなら自由であることだけを私は欲したのだから。/ あの男がからだを動かし、溜息をつく。

⇒「私には自分の肉体しかない。肉体しか持たない独りぼっちの男には、思い出をとどめておくことなどできない。思い出はそんな男を突き抜けて行ってしまふのだ。私が不平を言う筋合いではないだろう。何しろ、私は自由になることしか望まなかったのだから。/ チビのアシル氏がそわそわし、ため息をついている」

(54) Il doit attendre sa Nausée ou quelque chose de ce genre. Il y a donc à présent des gens qui me reconnaissent, qui pensent, après m'avoir dévisagé: «Celui-là est des nôtres.» / Eh bien ? Que veut-il ? Il doit bien savoir que nous ne pouvons rien l'un pour l'autre.

あの男は彼の〈吐き気〉を、あるいはそれに似たなにかを待っているにちがいない。結局現在、私を〈識別し〉、私をみつめたあとで、〈あれは同類だ〉と考える人たちがいるということである。それで、あの男はなにを望んでいるのか。私たちは互にどうもしてやれないことを、あの男は***充分に知るべきなのだ。

⇒「あの男もまた彼なりの〈吐き気〉あるいは何かそのようなものを待っているに違いない。つまり、今や、私の〈正体を嗅ぎつけ〉、私を穴のあくほど見つめてから〈彼の男は俺たちの仲間だ〉と考える人たちがいるということだ。/ そうだからといって、彼は何を望んでいるというのか。私たちが互に何もしてやれないことを、あの男はじゅうぶん承知しているはずだ」

(55) Il entre, farouche et soupçonneux, en flageolant un peu sur ses longues jambes, qui peuvent à peine supporter son torse. Je le vois souvent, le dimanche, à la brasserie Vézelize, mais il ne me connaît pas. Il est bâti comme les anciens moniteurs de Joinville: des bras comme des cuisses, cent dix de tour de poitrine et ça ne tient pas debout.

やっと上半身を支えているらしい長い脚の上で心持ちふらふらしながら、凄味のあふる、疑り深そうな感じの彼が入ってくる。私はしばしば日曜日にカフェ・レストランのヴェズリーズで彼を見かけるが、彼は私の顔を覚えてはいない(私のことを知らない)。彼は、ジョアンヴィル・ル・ボンの国立体育師範学校の昔のコーチのように頑丈な体格だ。腿ほどもある腕、百十センチもある胸囲など、***あれじゃ立ってはいられまい。

⇒「(医者)は、人見知りした疑い深そうな様子で、少しよろよろしながら入ってくる。長い脚がどうにかこうにか上半身を支えている。私はしばしば [...] 彼を見かけるが、彼は私のことを知らない。ジョアンヴィル体育学校のコーチ

上がりのように立派な体格で、腕は腿ほどもあり、胸囲は110センチ、それでいて、こいつ、まともに立ってられないのだ」

(56) Le petit bonhomme a levé la tête avec un sourire délivré. Et c'est vrai: ce colosse nous a délivrés. Il y avait ici quelque chose d'horrible qui allait nous prendre. Je respire avec force: à présent, on est entre hommes. / —Alors, ça vient, mon calvados ? / La bonne sursaute et s'en va.

例の男は解放されたうれしさを微笑に表わしてその顔を挙げた。ほんとうだ、この巨人が私たちを解放した。***私たちにいまにも襲いかかろうとした、なにか怖ろしいものがここにあった。私は力いっぱい呼吸をする。いま、私たちは人間の間にいる。「***じゃ、急いでくれ、例のカルヴァドスを」 / 給仕女はびくっとして奥へ行く。

⇒「チビのアシル氏が解放されたというように微笑み、顔を上げた。なるほど、本当だ。この大男のおかげで私たちは解放されたのだ。(ほんの少し前) ここには何か恐ろしいものがあって、私たちを掴まえようとしていたところだった。しかし、私は大きく息をつく。今や人間の(仲間内の)世界なのだ。 / 「おーい、まだか、カルヴァドスは！」[...]」

(57) Et ça y est: l'autre sourit avec humilité. Un vieux toqué: il se détend, il se sent protégé contre lui-même; il ne lui arrivera rien aujourd'hui. Le plus fort, c'est que je suis rassuré moi aussi. Un vieux toqué: c'était donc ça, ce n'était que ça.

ほら、案の定だ、男は卑下した微笑を浮べる。頭の変なじいさん、この定義に男は心がやわらぐ、自分が自分自身から保護されているように感じる。今日、男にはなにも変わったことは起きないだろう。驚いたことには、この私も安心したということである。頭の変なじいさん、それだったのだ、それでしかなかったのだ。

⇒「ほら、案の定だ、アシル氏は卑下した微笑を浮べる。頭の変なじいさん、そう言われると気が楽になるのだ。自分が自分自身の攻撃から守られているように感じる。(これで) 今日は何ごともなく過ごせそうだ。何よりもおかしいのは、私自身もほっとしたということだ。頭の変なじいさんか。なるほど、そういうことだったのだ。(確かに) それ以外にはありえなかったのだ」

(58) M. Achille est heureux comme il n'a pas dû l'être de longtemps. Il béé d'admiration; il boit son Byrrh à petites gorgées en gonflant ses joues. Eh bien ! le docteur a su le prendre !

アシル氏は幸福だ。***ずっと前から幸福であるはずがなかったみたいである。彼は感心してばかんと見とれている。頬を膨らませてビールをちびりちびり飲む。どんなもんだ。医者はこの男を自家薬籠中のものにした。

⇒「アシル氏は幸せを感じている。これほどの幸せは実に久しぶりのことに違い

ない。彼は憧れのあまり口をぼかんと開けたままだ。頬を膨らませて Byrrh をちびりちびり飲んでいる。何とまあ、医者はこの男の心をつかむことに成功したのだ」

(59) J'ai honte pour M. Achille. Nous sommes du même bord, nous devrions faire bloc contre eux. Mais il m'a lâché, il est passé de leur côté: [...]

私はアシル氏のために恥ずかしさを感じる。私たちは同じ世界の人間なのだから、彼らに対抗して一致団結するべきだったろう。けれども彼は私を捨ててしまい、彼らの側に移ったのだ。

⇒「私は(他人事ながら)アシル氏のことを恥ずかしく思う。私たちは味方同士なのだからあいつらに対抗して一致団結すべきところだ。ところが、彼は私を見捨てて、敵陣に寝返ったのだ」

(60) Seulement voilà, on m'a trop embêté avec ça dans ma jeunesse. Je n'étais pourtant pas d'une famille de professionnels. Mais il y a aussi des amateurs. Ce sont les secrétaires, les employés, les commerçants, ceux qui écoutent les autres au café: ils se sentent gonflés, aux approches de la quarantaine, d'une expérience qu'ils ne peuvent pas écouler au-dehors. Heureusement ils ont fait des enfants et ils les obligent à la consommer sur place.

[****Seulement voilà* どう訳す?] 若いころ、こんな風に私はずいぶん人びとに悩まされたものだ。しかしながら私は、そういう話のプロの***仲間に入ったことはなかった。だが愛好家もいるのだ。書記とか事務員とか商人とかで、彼らはカフェで他人の話に耳を傾ける。四十代に近づくと、外部では売り捌くことのできない経験で自分がいっぱいになっているのを感じる。幸いにも彼らは子どもたちを作ったので、子どもたちに経験をその場で消費させるのだ。

⇒「ただ、私はごめんだ。というのも、若いころ、人からそんな体験談を聞かされて、散々いやな思いをしたからだ。とは言っても、私は別に体験談のプロの家庭で育ったわけではない。だが(プロではないにしても)愛好家もいる。書記とか事務員とか商人とか、カフェで他人の話に耳を傾ける連中だ。そういう連中は、40代に近づくと、自分が様々な経験で膨れあがっているのを感じる。しかし、人から聞いた話だから、よそで言い触らすことはできない。幸い彼らには子供がいる。だから、家で子供たちに無理矢理体験談を話して聞かせるわけだ」

(61) Ils voudraient nous faire croire que leur passé n'est pas perdu, que leurs souvenirs se sont condensés, moelleusement convertis en Sagesse. Commode passé ! Passé de poche, petit livre doré plein de belles maximes. «Croyez-moi, je vous parle d'expérience, tout ce que je sais, je le tiens de la vie.» Est-ce que la

Vie se serait chargée de penser pour eux ?

自分たちの過去は失われてはいず、思い出は液化してやんわりと（叡智）に変わっている、と私たちに信じこませたがっている。何と便利な過去だろうか。立派な蔵言に充満した金びかの小型本、ポケットに入る過去。「わしを信じるがよい。わしはお前たちに経験について語ろう。わしの知識はすべて人生に由来するのだ」。〈人生〉は、***彼らのために考えることを引受けたりするだろうか [条件法過去]。

⇒「本当は私たちにこう思わせたいところなのだ。自分の過去は失われてしまったわけではない、思い出は凝縮して、やんわり心地よく〈英知〉に姿を変えたのだと。便利な過去だ！ポケットサイズの過去、ご立派な蔵言がいっぱい詰まった金表紙の小型本。「本当なんです、私の言っていることは経験にもとづいてるんです。私知っていることは、すべて人生から学んだのです。〈人生〉が彼らに成り代わって考えることを引き受けたとでも言うのだろうか（まさか）」

(62) Eh bien, oui: c'est ainsi que ça se passe et personne ne dira le contraire. Peut-être M. Achille n'a-t-il pas la conscience très tranquille. Il se dit peut-être qu'il n'en serait pas là s'il avait écouté les conseils de son père, de sa soeur aînée. Le docteur a le droit de parler: il n'a pas manqué sa vie; il a su se rendre utile. そうだ、それはこんな風な経過を辿ったのであり、だれもその反対を言うまい。アシル氏の***良心は非常に穏やかでないかもしれない。もしも自分が父や姉の意見に従っていたら、こんな風にはならなかっただろうなどと考えているかもしれない。医者には語る権利がある。彼は人生に失敗しなかったし、自分を有用なものにする術（すべ）を心得ていた [複合過去]。落着き払い、力に溢れた彼は、***あの漂流物の上に君臨する。それは一個の岩石だ。

⇒「なるほど、そうだ。（一般に）物事はこのような経過を辿るのであり、その反対だなどと主張する者はひとりもないだろう。ひょっとして、アシル氏にはいろいろ後ろ暗い [めたい] ことがあるのかもしれない。もしも父や姉のアドバイスに従っていたら、こんなことにはならなかっただろうと思っているかもしれない。（他方、）ロジェ先生のほうには話す権利がある。人生に失敗したわけではなく、いろいろ人の役に立ってきたのだから。彼はこの（アシル氏という）漂流物を眼下に、落ち着き払って力強くそそり立っている。まるで岩山のように」(フランス語で *épave* は比喩的に人を表すので、原文で読んでいけば数ページ前の *Et nous voici, deux épaves sans mémoire.* の *épave* を思い浮かべるが、日本語「漂流物」では無理だろう)

(63) Le docteur voudrait bien y croire, il voudrait se masquer l'insoutenable réalité: qu'il est seul, sans acquis, sans passé, avec une intelligence qui

s'empâte, un corps qui se défait. Alors il a bien construit, bien aménagé, bien capitonné son petit délire de compensation: il se dit qu'il progresse.

医者はそれに頼れると思った [条件法]。***抗(あらが)えない現実に眼を覆えると思った。自分はひとりであり、知識も過去も役に立たず、***知性は肥えるけれども肉体は崩壊してゆくというこの現実に。そこで彼は、そのような現実に対する埋合せというちょっとした妄想を巧みに組み立て、内装を施し、ふとん張りにした。すなわち、***自分は進歩しているという観念である。

⇒「ロジェ先生としてはそう信じたいところだろう。とても容認できない現実の前にできれば目を覆いたいと思う。確実に得たものも過去もない、あるのは肥大して鈍くなっていく知的能力と崩壊する肉体という、ひとりぼっちの現実。そこで、彼は埋合せのためのちょっとした妄想(という砦)を、すなわち、自分は進歩しているという思い込みをしっかりと建設し、内部をしつらえ、目張りをして密封状態にしたのだった」

(64) Il a des trous de pensée, des moments où ça tourne à vide dans sa tête ? C'est que son jugement n'a plus la précipitation de la jeunesse. Il ne comprend plus ce qu'il lit dans les livres ? C'est qu'il est si loin des livres, à présent. Il ne peut plus faire l'amour ? Mais il l'a fait. Avoir fait l'amour, c'est beaucoup mieux que de le faire encore: avec le recul on juge, on compare et réfléchit. Et ce terrible visage de cadavre, pour en pouvoir supporter la vue dans les miroirs, il s'efforce de croire que les leçons de l'expérience s'y sont gravées.

彼の思考には空自の部分があって、頭の中でそれが空転するときに***あるのではないか。それ故、彼の判断にはもう青年時代の性急さがないのである。本で読むことを、***もはや理解しないのではないか。それ故、いま彼は、書物から非常に遠ざかっている。***もはや性行為もできないのではないか。しかし昔はそれをした。ということは、いまでもそれをする、ということよりずっとましである。一步後退して、人びとは判断し、比較し、反省するからだ。そしてあの怖ろしい屍体の顔を鏡の中に眺めることに耐えるため、彼は、経験によって得た教訓が、顔に烙印されていると信じようと努めるのだ。

⇒「思考に空自ができて、頭の中が空転するときがある？ それはつまり、自分の判断から青春時代の無駄な性急さが消えたということだ。本を読んでももはや理解しない？ ということは、自分が今では書物からそれほど遠いところにいるということだ。もはやセックスもできない？ しかし、昔はしたよ。昔、セックスをしたということは、今でもするということよりずっと上等なことではないか。時間的距離があれば、判断し、比較し、よく考えることができるからだ。それから、このまるで死人のような恐ろしい自分の顔、鏡に映るこの顔に耐えるため、ロジェ医師はそこに経験から得た教訓が刻み込まれているのだと考え

ようとする」

(65) Je lui souris. Je voudrais que ce sourire lui révèle tout ce qu'il essaie de se cacher. C'est ça qui le réveillerait, s'il pouvait se dire: «En voilà un qui sait que je vais crever !» Mais ses paupières retombent: il s'endort. Je m'en vais, je laisse M. Achille veiller sur son sommeil.

私は彼に***微笑みかける。私の微笑が、彼が自らに隠そうとしているすべての事柄を、彼にあばいてみせればいいと思う。もしも彼が、「おれが近いうちにお陀仏になることを〈知ってる〉奴があすこにいる」と考えることができたならば、私の微笑は彼の眠りを***醒ましたらう。だが彼の臉は再び垂れる。***彼はよく眠っている。私は立去らう。アシル氏に彼の眠りの番をさせて。

⇒「私は彼にニヤッとす。この笑いによって、彼が見ないようにしているすべてを見つけてやりたい。それでこそ彼は目を覚ますだらう。「あそこに1人、わしがもうじきくたばることを知っているやつがいる」と思ってくれさえしたらいいのだが。だが、彼の臉は再び垂れる。眠りに落ちるのだ。私はもう立去らう。ロジェ医師の眠りを見守るのは、アシル氏にまかせて」

5. カフェ・マブリから図書館まで (翻訳書 p.117-p.133)

(66) La vieille dit d'une voix traînante, comme si elle se parlait à elle-même: —Des fois qu'il serait mort... —Ah ben ! — le visage du garçon exprima l'indignation la plus vive — Ah ! ben ! merci. / Des fois qu'il serait mort... Cette pensée m'avait effleuré. C'est bien le genre d'idées qu'on se fait par ces temps de brouillard. La vieille partit. J'aurais dû l'imiter: il faisait froid et noir.

老婆は、ひとり言でも言うように、間延びした声で言った。ファスケルさんにもしものことでもあったら...「よせやい」ボーイの顔に激しい怒りのいろが現われた。「縁起でもない」/ 彼にもしものことでもあったら... ***この考えが私を掠めて行った [大過去]。たしかに、このような考えは今日みたいな霧の日に人が思いつくものだ。/ 老婆はでて行った。私も同じようにでるべきだったらう。ここは寒くて暗かった。

⇒「[...] / 「ひょっとしてファスケルさんが死んでたりして...」(さっき)私の脳裏にもそういう考えがちらっと浮かんだのだった。確かに、こんな霧の日には、ふとそんなことを考えたりするものだ。/ 婆さんは出て行った。私もそうすればよかった。カフェは寒くて暗かったから」(J'aurais dû... = 「...すればよかった」: 条件法が必ずしも日本語の文法形式に反映されない例)

(67) A la bibliothèque municipale, j'aurais trouvé de la lumière et du feu. / De nouveau, un visage vint s'écraser contre la vitre; il faisait des grimaces. —Attends un peu, dit le garçon en colère, et il sortit en courant. / La figure

s'effaçà, je restai seul. Je me reprochai amèrement d'avoir quitté ma chambre. 市立図書館に行けば、そこで燈火と暖かさとを見出すことができるだろう。/ またひとつの顔が窓硝子にびたっと貼りついて、しかめ面をした。「ちょっと待て」ボーイは怒鳴って、走りながらでて行った。/ 顔は消えた。私はひとりになった。外出したことを苦々しく思い、自分を***答めたかった。

⇒「市立図書館だったら、明かるく暖かったのに。/ また、1つの顔が窓ガラスにびたっと押しつけられた。しかめ面をしている。「ちょっと待ってろよ」ボーイは怒鳴り、走って出て行った。/ 顔は消え、私ひとりが残った。自分の部屋から出たことを苦々しく後悔した」

(68) Derrière la caisse, dans l'ombre, quelque chose craqua. Ça venait de l'escalier privé: est-ce que le gérant descendait enfin ? Mais non: personne ne se montra; les marches craquaient toutes seules. M. Fasquelle dormait encore. Ou bien il était mort au-dessus de ma tête.

帳場のうしろの蔭の中でなにかが軋った。それは私用階段のほうでしたのだ。支配人がやっと降りてきたのか [自由間接話法]。いやそうではない。だれの姿も現われなかった。踏板がひとりでに軋ったのだ。ファスケルさんはまだ眠っていた。それとも、私の***頭上で死んでいた。***

⇒「帳場のうしろの暗がりではなにかが軋った。その音は私用階段のほうから聞こえてくる。やっと支配人が降りてくるのだろうか。いや違う、だれも現われなかった。踏板がひとりでに軋っている。ファスケルさんはまだ眠っているのだ。さもないと、私の頭の上のほうで死んでいる」(単純過去主体の語りで、半過去は日本語では「テイル」形で訳すほうが自然な場合が多い。ある程度、自由間接話法に代わる存在だと言えよう)

(69) Mais était-il encore dans son lit ? N'avait-il pas chaviré, entraînant les draps avec lui et cognant de la tête contre le plancher ?

やはり彼はまだベッドの中なのか。敷布をひきずって床に頭をぶつけ、引っくり返っているのではなかったか [自由間接話法 / 現在分詞]。

⇒「しかし、(ほんとうに)彼はまだベッドの中なのだろうか。シーツと一緒にベッドから転げ落ちて、床で頭を打ったのではないだろうか」

(70) Il faudrait traverser cette ombre. L'escalier craquerait. En haut, je trouverais la porte de la chambre... あの暗闇を通り抜けねばならないだろう。階段が軋るだろう。上の階で寢室の扉が見出せるだろう...。[条件法と読むか、過去未来と読むか?]

⇒「あの暗がりを通り抜けなければならないところだが。階段がミシミシいうだろうな。上まで行ったら、部屋のドアが見えて...」

(71) —J'ai entendu du bruit là-haut, lui dis-je. —C'est pas trop tôt ! —Oui,

mais je crois que ça ne va pas: on aurait dit des râles et puis il y a eu un bruit sourd. / Dans cette salle obscure, avec ce brouillard derrière les vitres, ça sonnait tout à fait naturel. Je n'oublierai pas les yeux qu'il fit. / —Vous devriez monter pour voir, ajoutai-je perfidement. —Ah non ! dit-il; puis: —J'aurais peur qu'il m'attrape. Quelle heure est-il ? —Dix heures. —J'irai à dix heures et demie, s'il n'est pas descendu.

「上で何か音がしたよ」「**あまり早くもありませんからね」「**そりゃそうだ、妙だったよ、喘ぎみたいだったし、それから鈍い音がしたぜ」 / 窓硝子の向うはあの霧で、薄暗いこの部屋の中では、私の言葉はまったく自然に響いた。私は彼のした眼ざしを忘れないだろう。「たしかめに上ってみるべきだね」と私は陰険に言い足した。「**いいですよ [曖昧]」と彼は言った。「それに叱られるとこわいですから。いまなん時ですか」「十時」「もし降りてこなかったら十時半に行ってみましょう」

⇒「上でなんだか音がしたよ」「マスター、やっと今頃になってお出ましますかね！」「うん、だが様子がおかしいと思うんだ。喘ぐ声のようだったし、それから、ズシンという音がしたし」 / [...] / 「上がってみるべきじゃないかな」と私は小ずるく言い足した。「冗談じゃありませんよ！ [...] そんなことしたらガミガミ言われてしまいます。今、何時ですか」「10時」「10時半になっても降りてこなかったら、行ってみることにします」

(72) Beaucoup de monde, surtout des femmes: des bonnes, des femmes de ménage, des patronnes aussi, de celles qui disent: «J'achète moi-même, c'est plus sûr.» Elles flairaient un peu les devantures et finissaient par entrer.

大勢の人びと、ことに女たち。女中、家政婦、それから「自分で買うわよ、そのほうがずっとたしかだもの」という主婦たちもいる。彼女たちは店頭でちょっと様子を窺い、ついに中に入って行く。

⇒「人出が多い、とくに女たち。女中、家政婦、それから一家の主婦たちもいる。(女中たちには任せておけず)「自分で買うわよ、そのほうがずっとたしかだもの」というタイプの主婦だ。みんな店頭でちょっと様子を窺い、それからようやく中に入って行く」

(73) De temps à autre, je voyais à travers la glace une main qui désignait les pieds truffés et les andouillettes. Alors une grosse fille blonde se penchait, la poitrine offerte, et prenait le bout de chair morte entre ses doigts. Dans sa chambre, à cinq minutes de là, M. Fasquelle était mort. / Je cherchai autour de moi un appui solide, une défense contre mes pensées. Il n'y en avait pas: peu à peu, le brouillard s'était déchiré, mais quelque chose d'inquiétant restait à traîner dans la rue. Peut-être pas une vraie menace: c'était effacé, transparent.

Mais c'est justement, ce qui finissait par faire peur.

ときどき窓硝子越しに、フランス松露を詰めた豚の足や小型アンドゥイユを女の手が指さしているのを見た。***すると全髪の肥った娘が、胸をつきだし前ごみになって、死んだ肉のきれはしを指で抓んだ〔半過去〕。***それから、5分たって、ファスケル氏はその寝室で死んだのだ〔自由間接語法〕。/ 私は、この考えから身を守るための堅固な支え、防禦物を周囲に求めたが、そんなものは無かった。少しずつ霧は切れてきたが、なにか不安な気配が街の中を彷徨していた。それは恐らくほんとうの凶兆ではない。それは目立たず、透明だった。しかしまさにそれだからこそ、***ついに私は恐怖を抱いた。

⇒「ときどき窓硝子越しに、[...] 女の手が指さしているのが見える。すると、その度ごとに全髪の肥った娘が、胸をつきだし前ごみになって、死んだ肉のきれはしを指で抓むのだった。ここから5分という近い場所に、自室で死んだファスケルさんがいる... / 私は、あれこれ考えてしまう自分から身を守るための堅固な支え、防禦物を周囲に求めた。(しかし) そんなものはない。少しずつ霧は晴れてきてはいた。だが、なにか不安な気配が相変わらず通りをうろうろしていた。恐らく本当に人を脅かすものではないだろう。目立たず、透明だ。しかし、まさにそういうものが結局は人に恐怖を与えるのだ」

(74) Brusquement, j'eus une vision: quelqu'un était tombé, la face en avant et saignait dans les plats. L'oeuf avait roulé dans le sang; la rondelle de tomate qui le couronnait s'était détachée, elle était tombée à plat, rouge sur rouge. La mayonnaise avait un peu coulé: une mare de crème jaune qui divisait la rigole de sang en deux bras.

突然、私は幻を見た。ある男がうつ伏せに倒れ、皿の中に血が流れた。卵は血の中を転がった。卵を飾っていたトマトの輪切りが離れて落ち、べちゃんこになった。赤の上に赤だ。マヨネーズが少し流れた。血の溝を二本の腕のように分けている黄いろいクリームの水溜まり。〔〈大過去→半過去〉 = 〈複合過去→現在〉〕

⇒「[...] 誰かが顔から倒れ込んだのだ。料理の中で血を流している。卵が血の中に転がり、卵の上に載せてあった輪切りトマトがずれて、ペタッと下に落ちている。赤の上の赤。マヨネーズが少し流れ出て、黄色いクリームの沼ができ、(中の島のように) 血の川を2つの流れに分けている」

(75) Mais, avec l'Autodidacte, on n'est jamais deux qu'en apparence.

しかし独学者とでは、絶対に外見的にだけふたりであるにすぎない。

⇒「しかし、独学者が相手では、ふたりというのは見かけだけで、本当にふたりということには絶対ならない」

(76) J'avais envie de déjeuner avec lui comme de me pendre.

彼と午餐をともにするというのは、***首吊り自殺をするのと同じようにやってみたいこ

とだった。

⇒「彼と昼食をともにするぐらいなら、首でも吊ったほうがましというものだ」

(77) Le brouillard avait envahi la pièce: pas le vrai brouillard, qui s'était dissipé depuis longtemps—l'autre, celui dont les rues étaient encore pleines, qui sortait des murs, des pavés. Une espèce d'inconsistance des choses. Les livres étaient toujours là, naturellement, rangés par ordre alphabétique sur les rayons, avec leurs dos noirs ou bruns et leurs étiquettes UP lf. 7996 (Usage public — Littérature française) ou UP sn (Usage public — Sciences naturelles).

霧が部屋の中に侵入してきた [大過去]。それは、ずっと前に散ってしまったほんとうの霧ではなく一別の霧，街にまだ充満している，壁や敷石から出てくる霧だった。事物の不安定といったものが生じた。もちろん，書物はいつものようにそこにあった。黒色あるいは褐色の背をし，UP lf. (公用—フランス文学)・七九九六とか，UP・Sn (公用—自然科学)とかいうラベルのついた書物はアルファベット順に本棚に並んでいた。

⇒「霧がすでに閲覧室の中に侵入してきていた。(もちろん) 本当の霧ではない。霧はとっくに晴れている。(そうではなくて) 別の種類の霧，まだ町の通りに充満している霧，壁や敷石からにじみ出てくる霧だ。(要するに) 事物が頼りないもやもやしたものになっている雰囲気。書物はそこに，当然ながら，黒色あるいは褐色の背表紙に [...] などのラベルをつけて，アルファベット順に棚に並んでいる」

(78) Saint Denis lui-même entrerait-il en portant son chef dans ses mains, il faudrait qu'il entre par la droite, qu'il marche entre les rayons consacrés à la littérature française et la table réservée aux lectrices. Et s'il ne touche pas terre, s'il flotte à vingt centimètres du sol, son cou sanglant sera tout juste à la hauteur du troisième rayon de livres. Ainsi ces objets servent-ils au moins à fixer les limites du vraisemblable.

聖ドニその人が入ってくるとすれば，右側からで，両手で自分の首を持ちながら，フランス文学にあてられた本棚と婦人閲覧者のためのテーブルの間を歩いてこなければなるまい [ジェロンディフは *entrer* にかかる]。もしも足が地に着かず，地上二十センチメートルのところを漂っているとすれば，血まみれの彼の首は，どうにか三段目の本棚の高さに達するだろう [未来形であることに注意]。***そうすれば，読書室にあるいろいろの物が，ほんとうらしさの限界を決めることに少なくとも役立つだろう。

⇒「仮に聖ドニ自身が(斬り離された)自分の頭を手に入ってくるとしたら，(当然) 右側から入り，フランス文学が収められている棚と女性閲覧者用のテーブルの間を歩くことになるだろう。体が宙に浮いて，地上20センチのところを漂うとすれば，血まみれの彼の首はどうか本棚の3段目あたりに位置すること

になる。すなわち、ここにある様々な物体は、(本来)少なくとも、いかにも(何かあったらこうなるよという)本当らしさの限界を定めてくれているものなのだ」

(79) Eh bien, aujourd'hui, ils ne fixaient plus rien du tout: il semblait que leur existence même était mise en question, qu'ils avaient la plus grande peine à passer d'un instant à l'autre.

ところで今日、これらの物は、もはや少しも限界を決めることをしなかった。これらの存在そのものが問題とされており、一刻一刻を過ぎて行くことに非常な苦痛を感じているかに見えた。

⇒「ところが今日は、物体がもはやまったく何も定めてくれなかった。物体の存在そのものに疑念が突きつけられ、今の瞬間から次の瞬間への移行に限りない困難を感じているかのようだった」

(80) Je me répétais avec angoisse: où aller ? où aller ? Tout peut arriver. De temps à autre, le coeur battant, je faisais un brusque demi-tour: qu'est-ce qui se passait dans mon dos ? Peut-être ça commencerait derrière moi et, quand je me retournerais, tout d'un coup, ce serait trop tard. Tant que je pourrais fixer les objets, il ne se produirait rien: j'en regardais le plus que je pouvais, des pavés, des maisons, des becs de gaz; mes yeux allaient rapidement des uns aux autres pour les surprendre et les arrêter au milieu de leur métamorphose.

どこへ行くのか、どこへ行くのか、と私は苦しげに自問した。〈どんなこと〉も起こりうる。時折、胸をどきどきさせて、私はふいに引返した。私の背後でなにが起きたのか。多分それは私のうしろではじまったのだろう、そして急にふりむいたとき、***すでに遅すぎたのだろう [自由間接話法]。事物をみつめることが私にできる限りは、なにごともしないだろう。それで私は、できるだけ執拗に、敷石や家々やガス灯を眺めた。***私の眼はひとつのものから他のものへと素早く移った。それらのものを、その変身のさ中において襲い、そこに釘づけにしようとした。

⇒「私は強い不安に駆られ、心の中で繰り返していた。“どこに行こう？どこに行こう？”何が起こるか分かったものではないのだ。(そんなわけで)私は胸をどきどきさせながら急に回れ右を試みた。“いったい背後で何が起きているのだろう？”というわけだ。もしかしたら、例のやつが始まるのかもしれない。そして、急に振り向いても、手遅れかもしれない。物体をずっと見続けていることができたなら、その間は何も起こらないはずだ。(そう思って)私は、敷石を、家々を、ガス灯を見つめた。私の視線は物から物へと素早く移動していた。物に不意打ちを食らわせ、変身のさなかでそいつを掴まえて身動きできないようにしてやるためだ」

(81) A un moment le petit vieillard se mit à rire: je vis la jeune femme frissonner de la tête aux pieds. Mais j'avais déchiffré à l'envers le titre du livre qu'il lisait: c'était un roman gai.

あるとき、小柄な老人が笑いだした。すると若い女が全身を慄わせるのを私は見た。しかし先刻、私は老人の読んでいる本の標題を逆さに判読した。それはユーモア小説だった。

⇒「ふと、小柄な老人が笑いだした。若い女が（まあ厭だというように）全身を慄わせるのが見えた。しかし、私はすでに本のタイトルを反対方向から判読して知っていたのだ。それが諧謔小説だということを」

(82) —On ferme, dit le Corse, cinq minutes plus tard. / Le vieillard hocha la tête d'un air indécis. La jeune femme repoussa son livre, mais sans se lever. Le Corse n'en revenait pas. Il fit quelques pas hésitants, puis tourna un commutateur.

「***五分後に閉めます」とコルシカ人が言った。/ 老人は決心のつきかねる様子で首を振った。若い女は書物を押しやったが立上らなかつた。コルシカ人は***決めたことを取消したりはしなかつた。彼はためらいがちに数歩進むと、スイッチを廻した。

⇒「5分ほどして、“閉館です”とコルシカ人が言った。老人は中途半端にうなずいた。若い女は本を押しやったが、立ち上がらない。コルシカ人は驚いた様子をしてしたが、ためらうように数歩進み、それから明かりを消した」

6. ブウヴィルの美術館（翻訳書 p.134-p.154）

(83) Déjà, sur la toile, la bonne, une servante maîtresse aux traits marqués par le vice, avait ouvert le tiroir d'une commode et comptait des écus. Une porte ouverte laissait voir, dans la pénombre, un homme à casquette qui attendait, une cigarette collée à la lèvre inférieure. Près du mur un chat lapait du lait avec indifférence.

画布の上では、悪賢さが見え見えの、***家事を取り仕切っていた女中頭が、すでに整理ダンスの引き出しを開け、エキュ金貨を数えている。開け放たれた戸口から、薄暗がりの中で、くわえ煙草を下唇で押さえ、女のでてくるのを待っている制帽の男が見える。壁のそばでは、猫が無関心に牛乳をなめている。

⇒「画布の上では、(死者には目もくれず) 奉公人だが愛人でもあった女中一悪徳が刻み込まれた顔立ちだが、すでにダンスの引き出しを開け、金貨を数えている。開いたドアの向こうの薄暗がりの中に帽子をかぶったくわえ煙草の男が見える。女が出てくるのを待っているのだ。壁のそばでは、猫が素知らぬふりで牛乳をなめている」

(84) Mais, si je passais outre, que je sache bien ceci: dans le grand salon où

j'allais entrer, plus de cent cinquante portraits étaient accrochés aux murs; si l'on exceptait quelques jeunes gens enlevés trop tôt à leurs familles et la mère supérieure d'un orphelinat, aucun de ceux qu'on avait représentés n'était mort célibataire, aucun d'eux n'était mort sans enfants ni intestat, aucun sans les derniers sacrements. En règle, ce jour-là comme les autres jours, avec Dieu et avec le monde, ces hommes avaient glissé doucement dans la mort, pour aller réclamer la part de vie éternelle à laquelle ils avaient droit. Car ils avaient eu droit à tout: à la vie, au travail, à la richesse, au commandement, au respect et, pour finir, à l'immortalité.

しかし、もし私が***ほんとうに行きすぎってしまったのだったら、つぎのことをよく知るべきである。すなわち、私が入ろうとしていた大展示室には、百五十枚以上の肖像画が壁にかかっていた。その中から、あまりに早く家族の許からあの世へ連れ去られた数人の青年と、孤児院の女院長を除けば、ここに掲げられた人びとのだれもが独身では死ななかった。ひとりとして、子どもなく、遺言なく、臨終の秘蹟なくして死ななかった。これらの人びとは、その日も他の日々と同様、神と世間との取り極め通りに、徐ろに死の中へ移行していったのだ。永遠の生命の分け前を要求しに行くために。彼らはその権利を持っていたのである。

⇒「しかし、警告を無視して中に入ろうというのなら、次のことを心得ておかねばならない。すなわち、これから入る大展示室には、[...]が壁に掛かっていることを。そして、そこに描かれている人たちの中には、[...]を除けば、独身のままで死んだ者や、子供もなく、遺言も残さず、臨終の秘蹟も受けずに死んでいった者など一人もいないということ。この連中は、生きた日々も死の当日も、神や世間とちゃんと折り合いをつけていたから、安らかに死の世界に入っていたのだ。彼らにとって当然の権利である永遠の生命の分け前にあずかろうとして」

(85) Je compris alors tout ce qui nous séparait: ce que je pouvais penser sur lui ne l'atteignait pas; c'était tout juste de la psychologie, comme on en fait dans les romans. Mais son jugement me transperçait comme un glaive et mettait en question jusqu'à mon droit d'exister. Et c'était vrai, je m'en étais toujours rendu compte: je n'avais pas le droit d'exister. J'étais apparu par hasard, j'existais comme une pierre, une plante, un microbe.

そのとき私は、私たちを隔てているものすべてを理解した。私が彼について考え得たことは、彼にとって痛くも痒くもないものだった。それは小説の中で行われる心理分析と言えば言えなくもなかったが、彼のほうからの批判は剣のごとく私を突き刺し、私の生きる権利に対してまでも疑問を投げかけた。だがそれはまさにその通りだった。私はそのことを

つねに理解していた。私に生きる権利はなかったのだ。私は偶然この世に現われて、石のように、植物のように、微生物のように存在していた。

⇒「このとき、私は理解した、何がこれほどまで私たちふたりを隔てているかを。いくら私が彼について考えてみたところで、彼にとっては痛くも痒くもないのだ。せいぜいのところ、小説に見られるような心理（描写）にすぎないからだ。しかし、彼が私に下す審判は、剣のごとく私を突き刺し、私の生きる権利さえも揺るがしかねなかった。そう、そうなのだ、私も今までずっと意識してきた。自分には生きる権利がないことを。[...]」

(86) A quoi pouvait-il penser ? A son passé d'honneur, qui lui conférait le droit de parler sur tout et d'avoir sur tout le dernier mot. Je n'avais pas été assez loin l'autre jour: l'expérience était bien plus qu'une défense contre la mort; elle était un droit: le droit des vieillards.

なにを彼は考えることができたか。それは名誉ある彼の過去についてである。それが、あらゆる事柄についてしゃべる権利を、どんな事柄についても相手をやりこめる権利を、彼に授けた。***私の気持はいつかの日とあまりかけ離れてはいなかった。〈経験〉はたしかに死に対する砦以上のものだった。それはひとつの権利だった。老人たちの権利なのである。

⇒「いったい何を考えているのだろうか？ 栄誉に包まれた自分の過去についてだ。その過去のおかげで彼にはあらゆる事柄についてしゃべる権利を、どんな事柄についても最後には鶴の一声を発する権利が与えられている。先日（ロジェ先生のことを書いたとき）、もうひとつ突っ込み不足だった。[...]『経験』とは実は権利に他ならない。つまり老人たちの権利」

(87) On les avait peints très exactement; et pourtant, sous le pinceau, leurs visages avaient dépouillé la mystérieuse faiblesse des visages d'hommes. Leurs faces, même les plus veules, étaient nettes comme des faïences: j'y cherchais en vain quelque parenté avec les arbres et les bêtes, avec les pensées de la terre ou de l'eau. Je pensais bien qu'ils n'avaient pas eu cette nécessité, de leur vivant. Mais, au moment de passer à la postérité, ils s'étaient confiés à un peintre en renom pour qu'il opérât discrètement sur leur visage ces dragages, ces forages, ces irrigations, par lesquels, tout autour de Bouville, ils avaient transformé la mer et les champs. Ainsi, avec le concours de Renaudas et de Bordurin, ils avaient asservi toute la Nature: hors d'eux et en eux-mêmes.

彼らは非常に精確に描かれていた。だが人間の顔に特有の神秘的な弱さは絵筆によっては写されなかった。彼らの顔は、いちばん生気が無さそうなのさえ、陶器のようにきれいさっぱりしていた。樹々や動物との、大地または水に関する思想とのなんらかのつながり

を、そこに探し求めてはみたが無駄だった。彼らが生きている間は、そのようなつながりを必要としなかったことは充分考えられた。しかし、後世に名を残す段になると、彼らは著名な画家に依頼して、ひそかに彼らの面上にあれらの浚渫、堀削、灌漑—それらの仕事によって彼ら自身ブーヴィルの周辺一帯の海や畑を改造したのだったが—を起してもらったのだ。かくて、ルノーダとボルデュランとの協力を得て彼らは全〈自然〉を屈服させた。全（自然）とは、彼らの外部にも内部にもあるものである。

⇒「彼らは非常に精確に描かれていた。ところが、彼らの顔からは人間の顔に潜んでいるはずの謎めいた弱さがかき消されていた。彼らの顔は、そのうち最もだらしく見える顔さえも、陶器のようにきっぱりしていた。（人間の顔だから）木々や獣たちとの、大地や水の思考とのなにかの類縁性があるはずだと探してみたが、見つからなかった。彼らが生きている間は、そのような自然とのつながりを断つ必要は当然なかったと思う。しかし、自分の人となりの後世に伝える時が来ると、彼らは高名な画家に依頼して、それとは分からねように、自分の顔に浚渫や堀削や灌漑を施して（すっかり自然の跡を消して）もらったのだ—それは、彼らがブーヴィル周辺の海や野原をすっかり変貌させたのと同じことだった。こんなふうに、ルノーダとボルデュランの協力を得て、彼らは全〈自然〉を従属させたのだった。自分の外にある自然も内側にある自然もすべて」

(88) Je me détournai et j'allai me planter en face du portrait d'Olivier Blévine. Une douce jouissance m'envahit: eh bien, j'avais raison. C'était vraiment trop drôle ! / La femme s'était approchée de moi. —Gaston, dit-elle, brusquement enhardie, viens donc ! / Le mari vint vers nous. —Dis donc, poursuivait-elle, il a sa rue, celui-là: Olivier Blévine. Tu sais, la petite rue qui grimpe au Coteau Vert juste avant d'arriver à Jouxtebouville.

私は向きを変え、オリヴィエ・ブレヴィニユの肖像と向き合って立った。**私は憐れたい悦びに襲われた。そうだ、***私の考えは道理に合っていた。まったくこの肖像画はあまりにも奇妙だった。 / 女が私のそばに来た [大過去]。 / 「ガストン」とふいに大胆になって彼女が言った。「こっちへいらっしゃい」 / 夫が私たちのほうにやってきた。「ねえ」と彼女は続けた。「この人の、このオリヴィエ・ブレヴィニユの名を持った道があるわ。ジュクストブーヴィルに着くちょうど前の、緑が丘へ昇る小さな道がそうなの」

⇒「私はレミ・パロタンから視線をそらし、オリヴィエ・ブレヴィニユの肖像の前に行き、向かい合った。穏やかな喜びが私を浸した。やっぱり、私の思ったとおりだった。こいつは大笑いだ！ / 女が（いつの間にか）私のそばに来ていた。 / 「ガストン」とふいに大胆になって彼女が言った。「こっちにきなさいよ！」 / [...]「ねえねえ、この人の名前、通りの名前になっているのよ。ね、オ

リヴィエ・プレヴィーニュ。ほら、ジュクストブヴィルに着くちょうど前の、Coteau Vert へ昇る小さな通り」

7. さらばロールボン（翻訳書 p.154-p.168）

(89) Je pris ma plume et j'essayai de me remettre au travail; j'en avais par-dessus la tête, de ces réflexions sur le passé, sur le présent, sur le monde. Je ne demandais qu'une chose: qu'on me laisse tranquillement achever mon livre. / Mais comme mes regards tombaient sur le bloc de feuilles blanches, je fus saisi par son aspect et je restai, la plume en l'air, à contempler ce papier éblouissant: comme il était dur et voyant, comme il était présent. Il n'y avait rien en lui que du présent.

私はペンを取って仕事に再び立ちむかおうとしたが、過去、現在、世界に関するこうした考察に***うんざりしてしまった [単純過去-半過去]。私の望みはただひとつ、すなわちロールボンに関する書物を静かに完成させてもらいたいということだった。だが私の視線が、綴じた白い紙の上に落ちたとき、***その様子に茫然となり、ペンを浮かせたまま眩しいほどのその紙をしばらくみつめていた。いかにその紙が***どぎつく、人目を引くものだったか。いかにそれが現存するという感じを与えていたことか。紙には現在があるだけだった。

⇒「私はペンを取り、再び仕事に没頭しようとした。過去、現在、世の中、についてこんな風にあれこれ考えることにうんざりしていたからだ。私の望みはただひとつ、ロールボンに関する書物を煩わされることなく完成させてもらうということだった。だが、私の視線が綴じた白い紙の上に落ちたとき、その白さに注意を奪われ、ペンを浮かせたままそのまばゆい紙を見つめた。紙はいかにも堅固で目立つものだった。いかにも今そこにあるということを誇示していた。この紙の中には現在以外の何ものも存在しない」

(90) Moi, je fournissais la matière brute, cette matière dont j'avais à revendre, dont je ne savais que faire: l'existence, mon existence. Lui, sa partie, c'était de représenter. Il se tenait en face de moi, et s'était emparé de ma vie pour me représenter la sienne. Je ne m'apercevais plus que j'existais, je n'existais plus en moi, mais en lui; c'est pour lui que je mangeais, pour lui que je respirais, chacun de mes mouvements avait son sens au-dehors, là, juste en face de moi, en lui;

私は彼に原材料を、どうしていいかわからなかったので、***転売すべきだった原材料 [指示形容詞] を、すなわち実存、(私の) 実存を供給していた。ところで彼の役割は、代理をすることだった。彼は私の正面にいて、私の生を奪っていた。それは、彼の生を私が

〈演じる〉ためだった。私は、自分が実存していることにもはや気づかなかった。私はもう自分の裡には実存せず、彼の裡に実存していた。私が食べるのも、呼吸をするのも、みな彼のためだった。私の動作のひとつひとつは私の外部で、ちょうど私の正面にいる彼の裡において、はじめてその意味を持った。

⇒「私はロールボンに原料（ou 素材）を、たくさんありすぎて、もてあましてこの原料を提供していた。つまり、実存、私の実存という原料を。ロールボンは、彼の受け持ちは、表象する（？）ことだった。私の前に立ちはだかっていた。私の（人）生に取り憑いてしまっていた、それは私に代わって彼自身の（人）生を〈表象する〉ためだった（どういふことかは次に説明がある）。私は、自分が実存していることに気づかなくなっていた。私はもう自分の裡には実存せず、彼の裡に実存していた。私が食べるのも、呼吸をするのも、みな彼の代わりだった。私の動作のひとつひとつは、私の外部で、ほらそこのちょうど私の正面の、ロールボンの内部で意味をもつのだった」

(91) Je n'étais qu'un moyen de le faire vivre, il était ma raison d'être, il m'avait délivré de moi. Qu'est-ce que je vais faire à présent ? / Surtout ne pas bouger, ne pas bouger... Ah ! / Ce mouvement d'épaules, je n'ai pas pu le retenir... La chose, qui attendait, s'est alertée, elle a fondu sur moi, elle se coule en moi, j'en suis plein.

私は彼を生かせる方法でしかなかった。彼こそ私の存在理由で、私から私自身を解放してくれたのである [大過去]。***ところでいま、私はなにをしようか。/ 特に身じろぎしないこと、〈身じろぎしないこと〉... ああ。肩のこの動き、それを怵（こら）えることができなかった... 待機していた〈例の物〉が急を聞いて駆けつけて、私に襲いかかり、私の中にそっと入り込み、私はそれでいっぱいになる。

⇒「私は彼を生かせるための手段でしかなかった。彼は私の存在理由だった。私を私自身から解放してくれていたのだ。（ところで、ロールボンがいなくなった）今、いったいどうしたらいいのだろうか？ / 何よりも身体を動かすのは禁物だぞ。〈身体を動かしては〉... おっと、しまった！ / この肩の動きを押さええ損なった！ 〈例のやつ〉が、待ってましたとばかり、襲いかかってきて、私の中に入り込む。私は例のやつに満たされてしまった」

(92) Maintenant, je sens son poids au bout de mon bras. Elle tire un peu, à peine, mollement, moelleusement, elle existe. Je n'insiste pas: où que je la mette, elle continuera d'exister et je continuerai de sentir qu'elle existe; je ne peux pas la supprimer, ni supprimer le reste de mon corps, la chaleur humide qui salit ma chemise [...] / Je me lève en sursaut: si seulement je pouvais m'arrêter de penser, ça irait déjà mieux

いま私は、腕の先端に手の重さを感じている。手は少し、***どうにか、柔かく弱々しく引っ張る。それは実存する。***くどくは言うまい。手をどこに置こうとも、それは実存し続けるだろうし、それが実存することを私は感じ続けるだろう。それを取除くことはできない。私の肉体の残りの部分を、私のワイシャツを [...] 取除くこともできない。/ はっとして私は椅子から立上る。せめて考えることをやめられたら、それだけです***うまくいっただろうに。

⇒「今や私は、腕の先に手の重さを感じている。手の重みで少し、ほんのわずか、下に引っ張られる感じがする、ふわっと柔らかな感じ。手は実存しているのだ。無駄な抵抗はやめよう。手をどこに置こうとも、それは実存し続けるし、それが実存することを私は感じ続けるからだ。手を抹殺することはできないし、ほかの部分も、私のワイシャツを汚す湿っぽい暖かさも [...] 抹殺することはできないのだ。/ はっとして私は立ち上る。せめて考えることをやめられたら、それだけでもずいぶん助かるのだが」

(93) Et puis il y a les mots, au-dedans des pensées, les mots inachevés, les ébauches de phrase qui reviennent tout le temps: «Il faut que je fini... J'ex... Mort... M. de Roll est mort... Je ne suis pas... J'ex...» Ça va, ça va... et ça ne finit jamais. C'est pis que le reste parce que je me sens responsable et complice. Par exemple, cette espèce de rumination douloureuse: j'existe, c'est moi qui l'entretiens.

それから、思考の中には言葉がある、言いかけてやめた言葉、たえず繰り返し現われる文章の下書き。「私はどうしても終え... 私は実存... 死んだ... ド・ロールボン氏は死んだ... 私は... でない... 私は実存...」。***いいとも、いいとも... これは絶対におしまいにはならない。これはその他のことよりもずっと悪い。なぜなら、私は自分に責任があり、共犯者であることを感じているからだ。たとえば、苦痛を伴う熟考である 〈私は実存している〉 というやつを維持しているのはこの私である。

⇒「それに、様々な思考の中には言葉がある、たえず繰り返し現われる言い始めでとぎれた文 {センテンス}」。「私は終えなけれ... 私は実存... 死んで... ド・ロールボン氏は死に... いや、私は... では... 私は実存... 分かった、もういいよ... だが、絶対におしまいにはならない。こっちのほうが他のことよりもずっとたちが悪い。なぜなら、自分に責任があり、自分が共犯者であることを感じるからだ。例えば、“私は実存する”というこのいかにも辛い一種の反芻、この反芻をいつまでも続けるのは他ならぬ私なのだ」

(94) En ce moment même — c'est affreux — si j'existe, c'est parce que j'ai horreur d'exister. C'est moi, c'est moi qui me tire du néant auquel j'aspire: la haine, le dégoût d'exister, ce sont autant de manières de me faire exister, de

m'enfoncer dans l'existence. Les pensées naissent par-dérrière moi comme un vertige, je les sens naître derrière ma tête... si je cède, elles vont venir là devant, entre mes yeux — et je cède toujours, la pensée grossit, grossit et là voilà, l'immense, qui me remplit tout entier et renouvelle mon existence.

いまのこの瞬間でさえ—まったくいやになるのだが—もし私が実存するとすれば、それは、実存することにひどく嫌気が差している（から）だ。私が熱望しているあの無から、私自身をひきだすのは私である、この〈私〉である。実存することへの憎悪にしる嫌悪にしる、いずれも〈私を実存させ〉、実存の中に私を追いやる方法である。思考はめまいのように、私のうしろで生れる、思考が頭のうしろで生れるのが感じられる... もしも***負ければ、それは前方に、私の眼の間にやってくるだろう—だが、私はいつも負けてしまう。思考はみるみる肥りだす。そして、いまや大きな形になった思考がすっかり私の内部を満たし、私の実存を更新する。

⇒「まさに今のこの瞬間でさえ — 実に恐ろしいことに— 私が実存しているのは、まさに実存することが厭でたまらないからこそなのだ。私なのだ、何が何でも自分は無の中に入りたいのに、何とその無から自分を引きずり出すのは私自身なのだ。実存することへの憎悪にしる嫌悪にしる、同じように〈私を実存させ〉、実存の中にのめり込ませることになってしまう。様々な思考がめまいのように私の背後から生れる。思考が頭のうしろで生れるのを私は感じる... ここで譲歩したら、それは前方から私の眼と眼の間にやってくるだろう — ところが結局、私はいつでも譲歩してしまう。思考は肥大し、肥大し、ほら今、巨大に成長した思考がすっかり私の内部を満たし、私の実存を更新する」

(95) Mon canif est sur la table. Je l'ouvre. Pourquoi pas ? De toute façon, ça changerait un peu. Je pose ma main gauche sur le bloc-notes et je m'envoie un bon coup de couteau dans la paume. Le geste était trop nerveux; la lame a glissé, la blessure est superficielle. Ça saigne. Et puis après ? Qu'est-ce qu'il y a de changé ? Tout de même, je regarde avec satisfaction, sur la feuille blanche, en travers des lignes que j'ai tracées tout à l'heure, cette petite mare de sang qui a cessé enfin d'être moi. Quatre lignes sur une feuille blanche, une tache de sang, c'est ça qui fait un beau souvenir. Il faudra que j'écrive au-dessous: «Ce jour-là, j'ai renoncé à faire mon livre sur le marquis de Rollebon.»

ナイフは机の上にある。刃を開く。そうしてはいけない理由があるか。ともかくそれは、物事を少し変えるかもしれない。私は左手をメモ用ノートの上に載せる、そして掌にナイフをぐざりとつき刺す。あまり神経質に振舞ったので、刃が滑り、傷は浅い。血がでる。***そしてそれから。なにか変わったことがあるか。いずれにしても私は、白紙の上に先刻私の記した文字の行を横切っている、私であることをついにやめた小さな血潮を満足気に眺

める。白紙の上の四行の字と、血痕と。それはよき思い出となろう [総称]。その下に私はつぎのように書くべきだろう。「この日、ド・ロールボン侯爵に関する本を書くことを中止した」と。

⇒「ナイフが机の上にある。刃を開く。こうなったら、やってやろうじゃないか。ともかく何かが変わるだろう。私は左手を紙の束の上に乗せ、掌にナイフをぐさりと突き刺す。力が入りすぎて刃が滑ったため、傷は浅い。血がでていいる。だが、それでどうだというのだ？ なにか変わったことがあるのだろうか。とはいえ、私は、白紙の上にさっき記した数行の文字を斜めに横切るこの小さな血だまりを見て嬉しくなる。この血は私であることをついにやめたのだ。白紙に書き込まれた4行、1つの血痕、いい思い出になるのは、まさにこういったものなのだ。この下に次のように書くことにしよう、「この日、私はド・ロールボン侯爵について本を書くことをあきらめた」と」

(96) Un doux désir sanglant de viol me prend par-derrière, tout doux, derrière les oreilles, les oreilles filent derrière moi, les cheveux roux, ils sont roux sur ma tête, une herbe mouillée, une herbe rousse, est-ce encore moi ? et ce journal est-ce encore moi ? tenir le journal existence contre existence, les choses existent les unes contre les autres, je lâche ce journal.

強姦という血塗れの、甘美な欲望が私をうしろから掴まえる、その欲望は耳のうしろでまったく甘美だ。耳が私の背後に流れる、赤毛の髪。私の頭の上の髪は赤い、濡れた草、赤い草、それもまた私なのか、そして新聞、それもまた私なのか、***新聞を持つこと、実存対実存、事物は対峙して実存する、私は新聞を放す。

⇒「強姦したいという凄惨で甘美な欲望が私を背後から捉える、実に甘美に耳の裏側を捉える。耳が背後へと流れていく。赤い髪、髪は私の頭上で赤い、湿った草、赤い草、これもやはり私なのだろうか？ そしてこの新聞、これもやはり私なのだろうか？ 実存と実存が密着した形で新聞をもつ。事物は互いにくっつき合って実存しているのだ。(考えがここに至って) 私は新聞を取り落とす」

(97) La maison jaillit, elle existe; devant moi le long du mur je passe, le long du long mur j'existe, devant le mur, un pas, le mur existe devant moi, une, deux, derrière moi, le mur est derrière moi, un doigt qui gratte dans ma culotte, gratte, gratte et tire le doigt de la petite maculé de boue, la boue sur mon doigt qui sortait du ruisseau boueux et retombe doucement, doucement, mollissait, grattait moins fort que les doigts de la petite qu'on étranglait, ignoble individu, grattaient la boue, la terre moins fort, le doigt glisse doucement, tombe la tête la première et caresse roulé chaud contre ma cuisse; [...]

家がふいに出現する，家が実存する，前の壁に沿って私は進む，私は長い壁に沿って実存する，壁の前を一步進む，壁が私の前に実存する，***家が一軒，二軒，私のうしろにある，壁が私のうしろにある，私のズボンのなかで搔く指，搔く，搔く，少女の泥まみれの指を引っ張る，泥水からでてきた私の指の上の泥，指は静かに静かにまた落ちる，指はぐったりした。卑劣漢に頸をしめられた少女の指を前よりも弱く搔いた，少女の指は泥を搔いた，大地を前よりも弱く搔いた，指が静かに滑る，***頭が最初に落ち，私の腿を暖かく転って愛撫する。

⇒「家がふいに出現する，家が実存している，前のほうへ壁に沿って私は進む，私は長い壁に沿って実存する，壁の前を一步進む，壁が私の前に実存している，“1, 2, 1, 2...”と歩調を整えて進む，私の後ろに，壁は私の背後にある，1本の指が私のパンティーの中を引っ搔く，引っ搔く，引っ搔く，そして少女の泥まみれの指を引っ張る，泥水の小川から出てきた私の指についた泥，私の指は静かに，静かに再び落ちる，指はふにゃっとして，卑劣な犯罪者に首を絞められる少女の指よりも引っ搔く力が弱い，少女の指は泥を掻きむしる，大地を掻きむしる力が弱くなる，指は静かに滑り，うつぶせに倒れ込み，そして私の太ももを暖かく転がり愛撫する」

8. 独学者との昼食（翻訳書 p.168-p.207）

(98) Dans quatre jours, je reverrai Anny: voilà, pour l'instant, ma seule raison de vivre. Et après ? Quand Anny m'aura quitté ? Je sais bien ce que, sournoisement, j'espère: j'espère qu'elle ne me quittera plus jamais. Je devrais pourtant bien savoir qu'Anny n'acceptera jamais de vieillir devant moi.

四日後にアニーに再会するだろう。さしあたって，これが私の唯一の存在理由である。それから先はどうなるか。もしもアニーに捨てられでもしたら。私は，自分が狡猾にも望んでいることをよく知っている。私はアニーがもう永久に私の許を去らないことを望んでいるのだ。しかしながらアニーが，老化するのを絶対に私に見せまいとしていることを充分に心得ておくべきだろう。

⇒「4日後にはアニーと再会するのだ。そう，これが差し当たり唯一の生き甲斐だ。だが，その後は？ アニーが再び去って行く日が来たとき，（どうする？）。もちろん，私にはよく分かっている。自分が狡猾にも何を期待しているのかを。（そう，）私は期待しているのだ，アニーがもう決して私から去って行かないことを。しかしながら，私が本当に心得ておくべきことは，（実は）私の前で老いていく自分をさらけ出すことなどアニーは絶対に肯んじないということなのだ」

(99) Je parcours la liste des viandes. Le boeuf en daube me tenterait. Mais je

sais d'avance que j'aurai du poulet chasseur, c'est la seule viande supplémentée. 私は肉のリストに眼を走らせる。蒸煮牛肉に***誘惑されそうだ [条件法]。しかし自分が***狩人風の鶏肉料理を選ぶだろうということをももって知っている。それは追加になっている唯一の肉だ。」

⇒「[...] ドーブ・ド・ブッフを食べたいところだが、しかし、注文を聞くまでもなく分かっている、食べさせられるのは狩人風若鶏だ。それが割増料金の必要な唯一の肉料理だから」

(100) Je suis tout oreilles: je ne demande qu'à m'apitoyer sur les ennuis des autres, cela me changera.

私は全身を耳にしている。私は、他人の***心配事に同情することを切望しているだけだ。それが私の気持ちを変えるだろう。

⇒「私は一言も聞き漏らすまいとする。他人の悩みごとに同情するなんて願ってもないことだ。気分が晴れるというものだ」

(101) Ils s'asseyent près de nous, l'un contre l'autre. Ils n'ont pas l'air de se connaître depuis longtemps. La jeune femme a un visage las et pur, un peu boudeur. Elle enlève soudain son chapeau et secoue ses cheveux noirs en souriant.

若いふたりは私たちのそばに、***向きあって腰を掛ける。ふたりは、ずっと前からの識合いであるという様子~~は~~していない。若い女は疲れているようだが均整のとれた、いくらか拗ねた顔をしている。女は、ふいに帽子を取って微笑みながら黒い髪を揺らす。

⇒「ふたりは、私たちのそばのテーブルに、ぴったり体を寄せ合って座る。それほど長いつきあいではなさそうだ。女のほうは、やつれてはいるが端正な(ou 清純な)顔をしている。少し仏頂面だ。彼女は帽子を脱ぎ、髪を左右に振る」

(102) Il prend le carnet dans ses mains tremblantes, il est très ému: — Voici justement quelque chose sur la peinture. Je serais heureux si vous me permettiez de vous en donner lecture. — Très volontiers, dis-je. / Il lit: «Personne ne croit plus ce que le XVIIIe siècle tenait pour vrai. Pourquoi voudrait-on que nous prissions encore plaisir aux oeuvres qu'il tenait pour belles?»

彼は懐える手で手帳を握る。彼はたいへん***興奮している。「ほら、ちょうどここに、絵画についての文章があります。これを読ませていただけますか」「悦んでお聞きしますよ」彼は読む。「十八世紀が真と看做したものを、いまはなんびともはや信じない。それなのに、なぜ十八世紀が美しいと看做した作品に、いまもおわれわれが楽しみを見出すことを、人は望むのだろうか」

⇒「彼は手帳を震える手に取る。ずいぶんドキドキしている様子だ。「ちょうどここに、絵画について私が書いたものがあるのですが、読ませていただけます

でしょうか」「ええ、どうぞ」彼は読む。“18世紀が真であるとみなしたものを、今ではもう誰も信じない。だとすれば、18世紀が美しいと判断していた作品を前にして、いまだに我々が喜びを感じなければならない理由などあるのだろうか？”

(103) Le jeune homme rit avec ironie. Elle reprend: — Je ne pourrais pas supporter une... déception. — Il faut avoir confiance, dit le jeune homme, là comme vous êtes en ce moment, vous ne vivez pas.

青年は皮肉よく笑う。彼女は言葉が続ける。「***抵抗できないかもしれないわ……失望感に」「***信頼しなければいけない」青年が言う。「***そうなんだ、もしいまみたいだと、君は生きてゆけないよ」

⇒「[...]」がっかりするような結果になったら... 辛すぎて耐えられないわ」「もっと自信をもつべきだな。[...] ほら、今みたいな状態じゃ、あなたは生きてるなんて言えないでしょう」

(104) Elle soupire: — Je sais ! — Regardez Jeannette. — Oui, dit-elle avec une moue. — Eh bien, moi je trouve ça très beau, ce qu'elle a fait. Elle a eu du courage. — Vous savez, dit la jeune femme, elle s'est plutôt précipitée sur l'occasion. Je vous dirai que, si j'avais voulu, j'aurais eu des centaines d'occasions de ce genre. J'ai préféré attendre.

女が吐息をつく。「わかってるわ」「よく考えてごらん、ジャネット」「ええ」女は渋面を作って言う。「ぼくはね、あの女がしたことはとても立派なことだと思うよ。勇気があったんだ」「よくって」若い女が言う。「あの女 {ひと} はむしろ機会に掴みかかったのだけわ。もしそうしかなかったら、あんなことは私にも数えきれないほどあったのよ。でも私は待つほうがいいと思ったの」

⇒「女が吐息をつく。「分かってます！」「ジャネットがしたことを見てごらんなさい」「ええ」と女は顔をしかめて言う。「僕はね、彼女がしたことはとても素晴らしいことだと思いますよ。勇気のある行動だったんだ」「あのね、[...] あの女 {ひと} は偶然できたチャンスに飛びついただけなんです。言わせてもらいますけど、私だってその気になればいくらでもチャンスはあったわ。でも、私は待つことにしたんです」

(105) — Vous avez eu raison, dit-il tendrement, vous avez eu raison de m'attendre. Elle rit, à son tour: — Qu'il est fat ! Je n'ai pas dit cela. / Je ne les écoute plus: ils m'agacent. Ils vont coucher ensemble. Ils le savent. Chacun d'eux sait que l'autre le sait.

「***そのほうが正しかった」彼が優しく言う。「ぼくを待ってくれたのは正しかった」今度は女が笑う。「まあなんてしょってるの。そういう意味じゃないわよ」/ 私はもう彼らの

おしゃべりに耳を貸さない。彼らにはいらいらしてくる。彼らは一緒に寝に行くだろうし、それをふたりは知っている。めいめいは相手がそれを知っているということを知っている。

⇒「それでよかったですよ。[...] 僕との出会いを待ってて、正解だったじゃないですか」[...]「まあ、この人ったら、しょっちゃって！ 私はそんなこと言ってもせんからね」/ もう彼らのおしゃべりに耳を貸さない。彼らにはいらいらしてくる。あのふたりは、これからセックスをする。それはお互い承知のうえなのだ。互いに相手がそれを知っているということを知っている」

(106) — Vous êtes gai, monsieur, me dit l'Autodidacte d'un air circonspect. — C'est que je pense, lui dis-je en riant, que nous voilà, tous tant que nous sommes, à manger et à boire pour conserver notre précieuse existence et qu'il n'y a rien, rien, aucune raison d'exister. / L'Autodidacte est devenu grave, il fait effort pour me comprendre. J'ai ri trop fort: j'ai vu plusieurs têtes qui se tournaient vers moi. Et puis je regrette d'en avoir tant dit. Après tout, cela ne regarde personne.

「朗かなんですね」独学者は用心深い様子で言う。「いや、こう考えるからですよ」私は笑いながら彼に言う。「***私たちがここにこうしている間、私たちの貴重な存在を維持するために食べたり飲んだりしている、しかし、存在することにはいかなる理由もない、まったくなにもない、ということなんです」/ 独学者は重々しい顔つきになった。彼は私を理解しようと努力する。***私は大笑いしすぎた。数人の顔が私のほうを振りむいた。それに、しゃべりすぎたことが悔まれる。要するに、これはだれにも関係のないことだ。

⇒「[...]「いや、こんなことを考えてしまいましたね」と私は笑いながら彼に言う。「私たちは、どいつもこいつもみんな、自分の貴重な存在を維持するためにこんなふう飲んだり喰ったりしてますがね、しかし、何にもありゃしないんです、何もね。存在する理由などまったくないんですよ」/ 独学者は重々しい顔つきになって、一生懸命私の言葉を理解しようとしている。(ところで)私の笑い声が大きすぎた。何人もの顔が私のほうを振り向いた。それに、このことについてあんなにしゃべったのはまずかった。結局のところ、だれにも関係ないことなのだから」

(107) Oui, une colère de malade: mes mains tremblaient, le sang est monté à mon visage et, pour finir mes lèvres aussi se sont mises à trembler. Tout ça, simplement parce que le poulet était froid. Moi aussi, d'ailleurs, j'étais froid et c'était le plus pénible: je veux dire que le fond était resté comme il est depuis trente-six heures, absolument froid glacé.

そうだ、病人の怒りである。私の手は震え [半過去]、血が顔に昇って、最後には唇も震え

だした。すべてこうしたことは、この若鶏が冷えていた、それだけのことからだろう。それに、私もまた冷えこんでいた。それは最も辛い冷え方だった。というのは、からだの芯が三十六時間も前からそうであるように、完全に冷え、凍りついてたということだ。

⇒「そうだ、病人の怒り。私の手は震えていた。そして、血が顔に昇って、最後には唇も震えだした。それもこれも、チキンが冷えていた、ただそれだけが原因だった。もっとも、私もまた、冷えていた。こちらのほうがもっと辛かった。というのも、肌を感じる温度(?)が36時間前からずっと同じまま、完全に凍りついた寒さだったからだ」

プロローグ

嘘野がふと気づくと、すでに予定の紙数を超えている。『嘔吐』の翻訳書では p.188まで来ている。

ここで、もう一度翻訳者の言葉を思い出しておこう。

1950年にはこう言っている：「訳者は、この長編を [...] 10年前に訳し、戦後、[...] 一書店より刊行したが、この機会に及ぶ限りの訂正を施した。前の版の幾多の誤訳、悪訳について深い良心の痛みを感じている」

そして、40年以上たって、こう書いた：「いろいろ直したいところが眼につき [...] 五カ月をかけてこのたびの改訳を完了した」

しかし、以上、アトランダムに拾った稚拙な訳文やどうしようもなく低レベルの訳文で分かるように、完成にはほど遠い。

嘘野は思う：「サルトルと付き合ったこの人の50年はいったい何だったのだろうか？ それよりも何よりも、これらの翻訳を読まされた恐らく何(十)万という若者たちをどう考えたらいいのだろうか？」

この作業に使った大学図書館から借りた2冊の訳本には、学生たちによる無数の書き込みがあった。彼らは一体どういう気持ちでこの翻訳を読んだのだろうか？ 日頃は投げやりな嘘野も、「願わくば篤学の士が出て、この困難な訳業を全うされんこと」を祈る気持ちである。

以下、いずれ新訳が出ることを願いつつ、翻訳書の検討から離れて、「8. 独学者との昼食」の残りの部分(翻訳書：p.191-p.204)を粗訳しておこう。

彼が眼で問いかけてくる。私はうなずいて賛意を表明するが、彼はやや失望しているようだ。もっと熱烈に賛成してもらいたいと思っているのだ。しかし、私にはどうしようもないことだ。彼の言うことを聞いていると、人から借用した考えや引用文だらけということが分かってしまう。でも、それは私のせいではない。彼が話していると、私が知っているすべてのヒューマニストが次々に姿を現す。彼には悪いが、私は実に多くのヒューマニ

ストを知っているのだ。ラディカルなヒューマニストというのは、とりわけ役人たちの味方だ。いわゆる“左翼的”ヒューマニストの主な関心は、(一般的な)人間の価値を維持することだ。だから、“左翼的”ヒューマニストはいかなる党派にも属さない。人間性というものを裏切りたくないからだ。だが、彼らの同情・共感には貧しい人びとに向けられる。彼らの豊かな古典的教養は貧しい人びとにこそ捧げられるのだ。“左翼的”ヒューマニストというのは、おおむね、妻を亡くした男やもめのようなもので、美しい眼をいつも涙で曇らせ、なにかの記念日がくるとすぐ涙を流す。彼らはまた、猫や犬など、すべての高等哺乳動物を愛玩する。コミュニスト作家というのは、第2次5カ年計画以来人間を愛している。彼らが人間を懲らしめるのは、人間を愛しているからなのだ。強者はすべてそうだが、彼らも控え目で、自分の感情を押し隠すことができる。しかしまた、正義の味方として悪を弾劾する辛らつな言葉の裏に、同胞を思う強く優しい激情が秘められていることを、視線や声で感じとらせる術も心得ている。カトリックのヒューマニストは、(ヒューマニストの中では)遅れてやって来た末っ子だが、いかにも驚異だともいうように人間について語る。貧しい中でもとくに貧しい生活、たとえばロンドンの港湾労働者の生活、半長靴造りの女工の生活は、なんと素敵なフェアリー物語だろうか！などと連中は言う。彼らは天使のヒューマニズムを選んだわけだ。天使(の心をもつ者)たちを教化するために、彼らは悲しくも美しい長篇小説を書くのだが、そういう作品がしばしばフェミナ賞を受賞したりする。

こうしたヒューマニストたちは、偉大な役割を果たす主役連中だが、実は、他にもヒューマニストはいるのだ、雲霞のようにたくさん。長兄のように同胞を見守り、責任感をもつヒューマニスト哲学者、新しい神話を創造しようとするヒューマニスト、古い神話で充分ではないかと言うヒューマニスト、人間においてその死を愛するヒューマニスト、人間においてその生を愛するヒューマニスト、なにかにつけ冗談を言って笑わせる陽気なヒューマニスト、陰気なヒューマニストもいるが、これは特にお通夜で出会うことが多い。こういった様々なヒューマニストは、例外なく互に憎みあっている。もちろん、それは個人としての憎しみであって、人間としての憎しみではない。しかし、独学者はそんなことは知らない。革袋に猫でも入れるように、あらゆるタイプのヒューマニストを一緒くたにして自分の内部に閉じこめている。ヒューマニストたちは互いに牙をむき誹謗中傷し合っているのだが、独学者がそれに気づくことはない。

独学者はすでに何か自信がなくなつたような表情で私を見つめる。

「私のような気持ちにはならないのでしょうか」

「そりゃ、何とつか ...」

心配そうで恨めし気な彼の様子を見て、失望させたことを、一瞬、悔む。しかし、彼は愛想よく続ける。

「分かってますよ。あなたにはご自身の研究や本があるわけで、あなたなりに同じ主義

主張に尽力なさっています」

私の本、私の研究だって？ この馬鹿！ ドジなことを言いやがって、まったくもう。

「僕はそんなことのために本を書いているんじゃないよ」

この瞬間、独学者の顔が変貌する。まるで敵がいるのを嗅ぎつけたみたいだ。彼がこんな表情を見せたことなど一度もなかった。私たちの間で何か死んでしまった。

彼は驚きを装いながら質問する。

「それでは... ぶしつけなことをお聞きしますが、いったい、なぜ本をお書きになるのですか」

「さあ... 自分でも分からないが、まあ何となく、書くために書くといったところかな」

独学者は、しめたと云わんばかりに（ここをせんど）ニヤッとす。私をやりこめたと思っているのだ。「無人島にいらっしゃってもお書きになるんですかね？ 物を書くということは、当然、読んでもらうためではないでしょうか」

彼は疑問形で話すが、癖なのだ。実際は断定を下している。表面を覆う優しさの内気が剥げ落ちた。普段の彼の面影はもうない。その表情には鈍重な強情さが浮かんでいる。自惚れの壁ができたかのようだ。

「こう言って欲しいものですね：“ある社会階層のために、友人のグループのために書いているのだ”。それなら完璧です。ひょっとして、あなたは後世のために書いておられるのかもしれませんが... でも、あなたの意図がどうであれ、あなたはだれかのために書いているのですよ」

彼は答を待つ。答がなかなか出てこないで彼は弱々しい（ou やるせなさそうに）微笑を浮かべる。

「もしかして、人間嫌いなんですか？」

彼のいかにも誠実さを装った和解の努力の裏に何が隠れているか分かっている。彼が要求しているのは、結局のところ、ほんの小さなこと、すなわちレットルを貼ってもいいよと言って欲しいだけなのだ。しかし、それは畏だ。私が同意したら、独学者の勝ちになり、私はすぐに向きを変えさせられ、掴まえられて、どうしようもなくなる（?）。なぜならヒューマニズムは、人間がどのような態度を取ろうとも、すべてを一緒くたに掴まえ、溶かしこんでしまうからだ。真正面からヒューマニズムに向向かおうとしたら、ヒューマニズムの思うつぼだ。ヒューマニズムというやつは自分の対立物から力ももらって生きているのだから。頑固で視野の狭い種族、力づくで無茶をやる種族も存在してヒューマニズムに抵抗するが、例外なくやっつけられてしまう。そういう連中がどんなに暴力に訴えても、最悪の行為に走っても、ヒューマニズムはなんなく消化して、泡立つ白色のリンパ液に変えてしまう。反主知主義や善悪二元論のマニ教だろうが、神秘主義、厭世主義、無政府主義、自己中心主義だろうが、すべてを消化して自分の胃の中に収めてきた。こういったものは、もはや乗り越えるべき段階、不完全な思想にすぎず、最終的に正当化されるの

はヒューマニズムの懐に入ってからだ。

人間嫌いもまたこのコンサートの中でそれなりの役割を与えられている。全体のハーモニーに欠かすことのできない不協和音というわけだ。人間を嫌う者も人である以上、ヒューマニズムもある程度人間嫌いであればならない。しかし、それは自分の憎悪をコントロールし得た科学的人間嫌いであって、最初に人を憎むのは、そのあとでさらに一層人を愛するために他ならない。

私はヒューマニズムの中に組み込まれるのもいやだし、自分の赤くきれいな血であの淋巴液の獣を肥らせるのも厭だ。自分が“反ヒューマニスト”だなどと名乗るようなへまはしない。私はヒューマニスト〈ではない〉、というだけのことだ。

私は独学者に言う。「人間(全般)を愛することなんてできないし、憎むことだってできないと思いますよ」

独学者は保護者然としたよそよそしい様子で私を見つめている。そして、自分の言葉に注意していないかのように呷く。

「人間たちを愛さなければいけません、愛さなければいけません...」

「愛さなければって、誰をです？ここに居る人たち？」

「ここに居る人たちもです。すべて」

独学者は若さに輝くふたり連れのほうを振りむく。愛すべきものがここにあるというわけだ。そして白髪の紳士をしばらく眺める。それから私に視線を戻す。彼の顔に無言の質問が読みとれる。私は“違うよ”と頭を振る。彼は私を憐れむような表情になる。

苛立って彼に言う。

「君だって、人間たちを愛してはいないさ」

「そうですね？私はそうは思いませんけどね」

もとの極めて恭しい態度に戻ってはいるが、面白くてたまらないというような皮肉な眼をしている。私を憎悪しているのだ。このマニャックな男に情けをかけたのが、そもそも間違いだった。こんどは私が問い詰める番だ。

「すると、君のうしろのあの若いふたりを愛しているというわけか？」

ふたり連れをもう一度見てから、彼は考え込み、疑り深い様子で続ける。

「ろくに知りもしないで彼らを愛していると、そう言わせたいのですね？そう、正直、ぼくはふたりを知らない...」

そして、自惚れた笑い声を上げて付け加える。

「ただし、まさに、愛こそが本当に人を知ることだ、とも言えるわけですけどね」

「いったい、何を愛しているというのかな？」

「彼らが若いってことは分かります、彼らの何を愛するかと言えば、その若さですよ。他にもいろいろありますが」

彼は言葉を切り、耳を澄ます。「ふたりの話していることが分かります？」

分かるどころの話ではない！若い男のほうは、周りの共感に大胆になり、たっぷりした声で、自分のチームのサッカーの試合ぶりを話して聞かせている。昨年、ル・アーブルのあるクラブチームと闘って勝利をおさめたのだ。

私は独学者に言う。「何か話を聞かせているんですよ」「そうですか、私にはよく聞こえないもので。話し声は聞えますよ。優しい響きの声と太い声とが代る代るに。それは...とってもいい感じですよ」

「ただね、僕の耳にはふたりの言っていることが聞こえているんだな、残念ながらね」

「と言いますと？」

「それがね、ふたりは芝居をしてるんですよ」

「本当ですかね？若さを演じているってわけですか、ひょっとして？言わせていただきますが、ふたりの芝居はなかなか価値があると思いますよ。そういう芝居を演じるだけで彼らの年齢に戻れるわけじゃないでしょう？」

彼の質問には皮肉がこめられている。

彼の皮肉に耳を貸さず、私は続ける。

「君は彼らに背をむけているので、聞き取れないかもしれないね...女性の髪は何色ですか？」

独学者は不意を突かれて口ごもる。

「えーと...」

ふたりを横目で見て、落ち着きを取り戻す。

「黒ですね！」

「ほら、分かったでしょう！」

「はあ？」

「分かったでしょう、あのふたりを愛してはいないってことが。多分、町中で出会ったら、あのふたりだってことに気づかないはずですよ。彼らはシンボルでしかないんですよ、君にとってはね。今、いい感じだなあ、って思ってるのは、全然彼らとは関係ないんだ。君は、抽象的な〈人間の青春〉、〈男と女の愛〉、〈人間の声〉に“ああ。いいなあ”って思ってるわけ」

「それで、どうなんです？そういったものは存在しないんですか？」

「もちろん、ありえません。存在してませんよ！〈青春〉も〈壮年〉も〈老年〉も〈死〉も...」

独学者の顔は、マルメロの実のように黄色で堅く、強い非難を込めて筋肉を硬直させている。

私はかまわず続ける。

「君の後ろの年配の男性にしても同じことなんだ。今、ミネラルウォーターを飲んでますがね。君が彼の中で愛の対象にしているのは、抽象的な〈壮年の男性〉なんだと思うな。」

自分は衰えていくが勇気をもってその老いに向かっている〈壮年の男性〉、そのままだったら年を取りたくないから、身繕いに気を配っている〈壮年の男性〉。違いますか?」

彼は挑むように言う。

「おっしやる通りです」

「それで、あの男が最低のやつだってことは、分からない?」

彼は笑う。軽率なことを言うやつだと思っているのだ。白髪に縁どられた素敵な顔をちらっと見て、言う。

「しかし、あの人があなたのおっしやるような人間らしく見えると仮に認めたとして、どうして顔つきだけであの人を判断できるんですか? 顔というのは、休息状態にあるとき、何も表わしませんよ」

ヒューマニスト連中には全然人を見る目がない! あの顔はあんなに〈多くを語って〉おり、あんなに明白ではないか —しかしヒューマニストたちの優しく抽象的な魂が顔の持つ意味に心を動かされたことは一度としてないのだ。

独学者が言う。

「どうしてひとりの人間の性格を〈決めつける〉ことができるんですか? “こんなやつだ、あんなやつだ”とすることができるんですか? ひとりの人間を知り尽くすなど、いったい誰ができるんですか? ひとりの人間がどういう可能性を秘めているか、いったい誰が分かるというのですか?」

人間を知り尽くす、だって! ついでだから、カトリックのヒューマニズムに一応挨拶しておこう。独学者は、自分では知らずに、カトリックのヒューマニズムからこの表現を借用したのだ。

私は言う。

「分かってます。分かってますよ、人間はすべてすばらしいってことは。君はすばらしい、私はすばらしい。神が造ったものとしてだけどね、もちろん」

彼はわけが分からないまま私を見つめ、それから薄笑いを浮べて言う。「多分、冗談をおっしやってるんですね。でも、人間にはすべて私たちから賞賛される権利があるってことは、その通りです。難しいことですからね、人間であるということは、とっても難しいことですから」

彼は、自分では気づかずに、キリストにおける人間への愛から離れている。うなずいているが、無意識の模倣という奇妙な現象によって、あの哀れなゲエノに似た雰囲気になる。

私は言う。

「こう言っちゃ悪いけどね、そうなると、私には、自分が人間であるという確信が持てなくなるな。なにしろ、人間であることがそんなに難しいとは思ってもみなかったからね。(今まで、) 流れに任せて生きていけばいいんだと思ってたもので」

独学者は率直に笑うが、眼は相変わらず険しい。

「そりゃ謙遜すぎますよ。あなたの条件、つまり人間の条件に耐えるには、誰だってそうですが、多くの勇気と頑張りが必要なんですから。たとえば、一瞬の後は、死の瞬間かもしれませぬね。それを知っていて、あなたは微笑を浮かべることができるわけです。ほら！これって、すばらしいことじゃありませんか？最も取るに足りない行為でも、その中に」と彼は苦々しい口調で付け加える「実に大きなヒロイズムがあるのですよ」

「デザートはいかががします？」とウェイトレスが言う。

独学者は真っ青だ。石のようなった眼の半ばまで瞼が垂れている。選んでくださいとも言うようなかすかな手振りをする。

私は気力を振り絞って「チーズ」と言う。

「こちらの方は？」

独学者はびくっとする。

「えっ？ああ、そう、僕は何もいらぬ。食事はおしまい」

「ルーズ！」

ふたりの肥った男が勘定を済まし、出て行く。そのうちのひとりとは脚を引きずっている。マスターがふたりを戸口まで送って行く。重要なお顧客なのだ。（そういえば）ワインボトルがクーラーに入れて、出されていたっけ。

私は少し後悔して独学者をじっと見つめる。彼は今日の昼食をあれこれ想像し、自分の人間への愛を他人に打ち明けられると思って1週間ずっと心待ちにしていたのだ。それほど、彼には人と話す機会がないのだ。ところがどうだ、私は彼の楽しみを台無しにしまった。結局、彼も私同様ひとりぼっちなのだ。彼のことを気にかける者など誰もいない。ただ、彼は自分が孤独であることを理解していない。それはそうだが、だからといって、彼の目を開かせるのは私の仕事ではない。

私は非常に気詰まりだ。確かに、腹を立てているが、彼に対してではなく、ヴィルガンのような連中にしても、それ以外の連中にしても、この可哀想な頭脳を毒したすべての連中に対して憤りを感じる。今ここで、そういう奴らを前にすることができたら、言いたいことは山ほどあるのだ。独学者には何も言わないことにしよう。彼には共感あるのみだ。アシル氏と同じ種類の人間、私と同じ陣営の人間なのだが、無智ゆえに、そしてよかれと思う熱意から、裏切ったにすぎない。

独学者の高笑で、私は陰気な夢想から醒める。「お許しください。でも、私の人間への愛の探さ、私を彼らのほうへ引き寄せる高揚感の強さを考え、他方、こうして理屈を言ったり、議論したりしている自分たちの姿を振り返ると...笑わずにはいられません」

私は黙ったまま、無理をして微笑を浮かべる。ウェイトレスが私の前に白いカマンベールチーズひと切れが載った皿を置く。私は室内をざっと見渡す。すると激しい嫌悪感が私を襲う。ここで私は何をしているのか？一体どういうわけで、ヒューマニズムをめぐってぐだぐだ議論する羽目になってしまったのだろうか？この人たちは、なぜここにいるのだ

ろう？ なぜ食事をしているのだろうか？ なるほどそう言えば、この連中は知らないのだ、自分たちが実存していることを。立ち去りたい、本当に自分の場所が用意されているところ、自分がびったり収まる場所、そんなどこかに行きたいものだ... しかし、私の場所などどこにもない。私は余計者なのだ。

独学者の態度が軟化する。私の抵抗が思ったほどではなかったからだ。私が言ったことはすべて帳消しにしてもいいと思っているのだ。内緒話でもするように私のほうにかがみ込んで言う。「結局、あなたはあの人たちを愛しておられるのですよ、私と同じように愛しておられるのです。言葉の表現が違うだけなんです」

口がきけなくて、私は頷く。独学者の顔が私の顔にくっつきそうだ。

彼は私の顔すれすれのところで自惚れた様子でにやりとする。まるで悪夢だ。私はひと切れのパンを苦勞して噛んでいるが、なかなか飲み込む気にならない。人間一般。人間たちをすべて愛さなければいけない。人間というのはすばらしい。むかついで吐きたいぐらいだ... おっと、いきなりやってきた、あの吐き気が。

大変な発作だ。上から下まで私の全身を揺るがしている。一時間前からこの発作がやって来るの感じていたが、自分自身に嘘をついて隠していたのだ。口の中のこのチーズの匂い... 独学者はべらべらしゃべり、その声私の耳に静かに響いてくる。しかし、私にはもう何の話なのかもさっぱり分からない。ただ、無意識にうなづくのみだ。

私の手はデザートナイフの柄をぐいっと握りしめている。黒い木製の柄が〈感じられる〉。それを握っているのは私の手だ。私の手。個人としてどうにかなるものなら、このナイフはむしろそっとしておきたいところだ。いつも何かに触って、何の役に立つというのか？

事物というのは触わるために作られてはいるわけではない。できるだけ事物を避けるようにして、事物の間をすすする通り抜けていくほうがよっぽどいいのだ。時々人は事物をひとつ手に取ったりするが、なるべく早く手放さざるをえない。ナイフが皿の上に落ちる。その音に白髪の男性がびくっとして私を見つめる。私は再びナイフを手に取り、刃をテーブルにあて、しなわせる。

吐き気というのは、なるほど、これなのか？ こんなにも明白なものなのか？ 吐き気については、ずいぶん頭を悩ましてきた！ ずいぶんいろいろ書いてきた！ しかし、それはどうでもいいことだ。すべてがこんなにどうでもいいというのは不思議なことだ。恐ろしいことだ。

水切りをしようとした例の日以来のことだ。あの小石を投げようとして、私は小石を見た。すべてが始まったのはあの時だ。つまり、小石が〈実存する〉のを感じたわけだ。それからその後も、他の〈吐き気〉があった。ときどき事物が手の中で実存しだすのだ。

「Rendez-vous des Cheminots」での例の〈吐き気〉があったし、それから、以前、窓から外を眺めていたある夜にもうひとつの吐き気があった。そして、さらに日曜日、公園

の中でもうひとつ、そして、さらにまたほかの吐き気があった。しかし、今日のように強く感じた吐き気はなかった。

「…古代ローマの、あの…」 独学者がなにか質問している、と思う。彼のほうを向いて微笑する。おやおや？ 彼はいったいどうしたんだ？ なぜ、椅子の上で縮こまっているんだ？ ということは、今、私は人に恐怖を与えているというわけか？ いずれこうなる運命だったのだ。第一、そんなことはどうでもいいことだ。彼らが怖がるのも完全な間違いとは言えない。今、私はとんでもないこともやりかねないと、自分でそう感じているのだから。たとえば、このチーズナイフを独学者の眼に突き刺す。そんなことにでもなったら、この連中がみんな私を踏みつけ、靴で蹴って私の歯を折ることだろう。

しかし、そんなことで私はひるみはしない。口の中のこのチーズの味の代りに血の味がしたところで、大して変わりはない。ただし、それには、何か動作をしなければならない、何か余分な出来事を生じさせなければならない。そう言ったことは余計なことだ。独学者が挙げる叫び声も — それに彼の頬を流れるであろう血も、ここにいる人たちみんながぎくっとする様も。こんな風の実存するものは、もう充分すぎるほどあるではないか。

みんなが私を見つめている。青春を代表するふたりも楽しいやりとりをやめている。女は開けた口をすぼめている。しかし、ふたりとも、私が危害を加える恐れはないことを、じゅうぶん分かってくれてもいいはずなのに。

私は立上る。すべてが私の周りを回っている。独学者は大きな眼で私をじっと見つめているが、私はその眼をえぐるつもりはない。

彼が呟く。

「もうお帰りですか」

「少し疲れ気味でしてね。お招きしていただいてありがとうございます。では、また」

帰り際に、左手にデザートナイフを持ったままなのに気がつく。私はナイフを皿の上に投げ落とし、皿が音を立て始める。沈黙に包まれて、部屋を横切る。みんなは食べるのをやめて、私を見つめている。食欲をすっかりなくしたのだ。もしも私が“わーっ”と叫びながら若い女のほうへ向かって行ったら、きっと彼女は喚き始めるだろうが。そんなことをするには及ばない。

それでも、店を出る前に振りむいて、連中に私の顔を見せる。この顔を彼らの記憶に刻みつけるためだ。

「失礼しますよ、みなさん」 彼らは答えない。私は立ち去る。これで、連中の頬に血色が戻るだろう。彼らはべちゃくちゃおしゃべりを始めるのだ。

どこに行っているのか分からない。ボール紙で造ったコックさんのそばに立ちつくしている。振り返るまでもない。窓硝子越しにみんなが私を見つめているのは分かっている。連中は驚きと嫌悪を込めて私の背中を眺めている。私が自分たちと同じで、人間なののだと思っていたのに、私は彼らを欺いたのだ。

突然、私は人間の姿を失った。彼らはこの極めて人間的な部屋から1匹のカニが後ずさりして逃げ出すのを見たのだった。今や、正体を暴かれた闖入者は逃げていった。人間の集まりは、そのまま続行される。彼らの視線とかき乱された思考が私の背中に集中するのを感じると、いらいらする。

車道を横切る。向こう側の歩道は砂浜と脱衣所に沿っている。大勢の人が海辺を散策している。春めいた詩的な顔を海のほうに向けている。それもこれも太陽のせいだ。彼らはお祭り気分なのだ。

この春に流行した明るい服装の女たちがいる。そういう子ヤギのつや出しレザーの手袋みたいにすわりとして白い女たちが通り過ぎていく。リセや商業学校に通っている大きな男の子たちや、勲章をつけた老人たちもいる。彼らは知り合いではないが、お互い同類だというように視線を交わしている。天気がとてもいいし、互いに人間同士だという意識があるからだ。人間というのは、宣戦布告の日には知り合いでなくても抱きあうものだ。また、春がくるたびに微笑し合う。

司祭がひとり祈禱書を読みながらゆっくりとした足どりで進む。ときどき顔を挙げ、これでいいのだというような様子で海を眺める。海もまた祈禱書であり、神を語るのだ。

軽やかな色彩、軽やかな香り、春の魂。「晴れ渡り、海は緑、湿り気よりもこの乾いた寒気を私は愛す」。詩人たち！私が彼らのひとりをコートの手もとって掴まえたならば、「私を助けに来てくれ」と言ったならば、彼は「このカニはいったい何なんだ？」と考え、私の手に外套を残して逃げ出すことだろう。

私は彼らに背を向け、両手をついて手すりによりかかる。〈本当の〉海は冷たくて黒い、そして妙な動物がうごめいている。海はあの緑の薄い膜の下に広がっている。薄い膜は人をだますためのものだ。私の周りの（「海は緑」と歌った）空気の精たちは、まんまとだまされたのだ。彼らには薄い膜しか目に入らない。だから、それが神が存在することの証明だというわけだ。

しかし、私には膜の下まで見える。表面のニスが溶けさり、きらきら光るピロードの細かな皮膚、神の創った桃のようになめらかな細かな皮膚が、私の眼の前で、あちらこちらで破裂し、亀裂ができて、小さな割れ目を作る。Saint-Élémir 行きの電車が来た。私はくると向きを変える。すると、一緒に、周りがあるものが、牡蠣のように蒼白く緑色になって、回転する。無駄だ、電車に飛び乗ったが、無駄なことだ、なぜなら私はどこにも行きたくないのだから。